



Title	サファヴィー朝支配下の聖地マシュハド : 16世紀イランにおけるシーア派都市の変容
Author(s)	守川, 知子; Morikawa, Tomoko
Citation	史林, 80(2), 1-41
Issue Date	1997-03-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34768
Type	journal article
File Information	80-2_p1-41.pdf



サファヴィー朝支配下の聖地マシュハド

——一六世紀イランにおけるシーア派都市の変容——

守川 知子

【要約】一五〇一年、イランではシーア派信仰を掲げるサファヴィー朝が成立し、イランにシーア派化の問題を投げかけた。しかしながら、実際にはどのような過程を経てシーア派化が進行し、当時の社会はどのような状況変化の影響を受けたのであろうか。本稿では、以上の如き問題関心から、シーア派化の先駆けともなるシーア派聖地マシュハドに焦点をあて、この聖地に対してサファヴィー朝政権の行った諸政策、及び都市の有力者層の変化を検討する。その結果、シーア派政権と一ニイマーム派シーア派ウラマーを中心とした有力者層が連携して都市のシーア派化を促進したことが明らかとなると同時に、サファヴィー朝シーア派信仰の特徴である呪詛行為が、イランのシーア派化に際し問題となり、マシュハドにおいてはスンナ派政権シャイバーン朝による一六世紀末の大惨事の主因となったことが指摘されるのである。

史料 八〇巻二号 一九九七年三月

はじめに

イラン東北部のホラーサーン州に位置するマシュハド Mashhad は、第八代イマーム、アリー・アッリダー（ペルシア語ではレザー）(Ali b. Musa al-Rida) (八一八年没)の殉教地である。この地は彼の墓廟（以下、レザー廟と呼ぶ）を中心に発展し、今日では多くの参詣者が訪れるイラン最大のシーア派聖地となっている。

今日のマシュハドの発展の礎は、一般に、シーア派を国教として採択したサファヴィー朝（一五〇一—一七二三）にあるとされているが、これまでのところ、サファヴィー朝期のマシュハドを扱った本格的な研究は全くと言ってよいほど為さ

れていない^①。しかしながら、サファヴィー朝成立当初(一六世紀)のマシュハドは、サファヴィー朝研究史上の問題、特にイランのシーア派化を考える上で、極めて重要な考察対象となることは疑い得ない。

本論に先立ち、一六世紀のマシュハドの政治状況を確認しておこう。サファヴィー朝成立後の一六世紀初頭、それまでスナナ派政権のティムール朝支配下にあったマシュハドは、サファヴィー朝とウズベク族のシャイバーン朝(一五〇〇—一五九九)のホラーサーンを巡る攻防に巻き込まれ、数年ごとに両政権の支配を交互に経験した^②。一五三二年にウズベク軍が撤退すると、その後半世紀の間、この地はサファヴィー朝が支配したが、一五八八年には、シャイバーン朝の君主、Abd Allah Khan がヘラート征服後に侵攻し、翌一五八九年、マシュハドを占領、以後十年間支配した。

一六世紀のマシュハドの政治状況は上述の如くであるが、一六世紀の初頭と一六世紀の末で、シャイバーン朝のマシュハド占領時の対応は大きく異なっている。一六世紀初頭には、シャイバーン朝君主 'Ubayd Allah Khan は、この聖地を征服するに当たって、マシュハドの軍人階級であったキジルバーシユのみを殺害し、聖地の住民に対しては何ら危害を加えることなく、征服後、有力者の土地税をも軽減した^③。さらに 'Ubayd Allah Khan や先の君主でありシャイバーン朝の創設者である Shaybani Khan らが、シーア・イマームの墓廟であるレザール廟に参詣していたという事実も指摘されている^④。

しかし、一六世紀末の侵攻時には、シャイバーン朝下のスナナ派ウラマーはマシュハド住民に対して次のようなファトワーを送付した。

醜悪なるシーアの集団が行い述べていることは風聞によって明らかであるように、イスラームと信仰の民の範疇から外れてしまっている。……不信心者たちを殺害し、彼らの財産を略奪し、庭園や耕地や家屋を焼きつくし荒廃させることは認められている。

[Abbas, I: 191]

ウズベク軍はこのファトワーに基づいてマシュハドに侵攻し、まずキジルバーシユ軍と戦った。そしてレザール廟に逃げ込

年表—16世紀のマシュハド

マシュハド関連の出来事	マシュハドのハーキム
	1500 [T] Muḥammad Muḥsin Mirzā
1508 Shaybānī Khān による征服	1508 [U] Sayyid Hādī Khwāja
1509 Shaybānī Khān, レザー廟参詣	
1510 Ismā'il, ホラーサーン遠征の途上で征服, レザー廟参詣	1510 [S] Aḥmad Beg Ustājīlū
1512 Aḥmad Beg, 対シャイバーン朝遠征に参加	1512 不在
1513 'Ubayd Allāh Khān の侵攻, 住民は進んで服従 Ismā'il, ホラーサーン遠征にて奪回	1513 [U] 'Ubayd Allāh Khān [S] Aḥmad Sulṭān Afshār ?
1524 Ismā'il 死去, Ṭahmāsp 即位	1522 [S] Būrūn Sulṭān Takkalū
1525 Būrūn Sulṭān, 宮廷に赴き, 翌年戦死	1525 (息子に委ねる)
1526 'Ubayd Allāh Khān の侵攻, 数カ月の包囲の末征服	1526 [U] Chaghatāy Bahādūr
1528 Ṭahmāsp の第1次ホラーサーン遠征によりウズベク軍 撤退, Ṭahmāsp, レザー廟参詣	1528 [S] Āghziwār Sulṭān Shāmlū
1529 'Ubayd Allāh Khān が再度征服, 数百人のキジルバー シュを殺害, 'Ubayd Allāh, レザー廟参詣	1529 [U] ?
1530 Ṭahmāsp の第2次遠征によりウズベク軍撤退 Ṭahmāsp, レザー廟参詣	1530 [S] Mantashā Sulṭān Ustājīlū
1531 ウズベク族のアミールたちの侵攻 Mantashā Sulṭān, 撃退後宮廷に召喚される	1531 [S] ?
1532 'Abd al-'Azīz Khān Uzbek が数千騎のウズベク軍と 駐留, Ṭahmāsp の第3次遠征を聞き, 撤退	1532 [U] 'Abd al-'Azīz Khān [S] Shāh Qulī Sulṭān Ustājīlū
1534 Ṭahmāsp, レザー廟のドームを改修	1534 [S] Šūfiyān Khalīfa Rūmlū
1535 'Ubayd Allāh Khān の侵攻, Šūfiyān Khalīfa の妻子が 防衛	1535 (息子に委ねる)
1536 'Ubayd Allāh Khān は征服を企図するも, Ṭahmāsp の 進軍(第4次遠征)を知り撤退	
1537 Ṭahmāsp, 遠征の掃路, レザー廟にて誓願	1537 Ya'qūb Sulṭān Ustājīlū
1540 'Ubayd Allāh Khān 死去	
1544 ムガル朝の Humāyūn, レザー廟参詣	? Shāh Qulī Sulṭān Ustājīlū ⁹⁾
1545 Dīn Muḥammad Khān Uzbek の侵攻, 数十日で撤退	
1549 Bahrām Mirzā の遺体をレザー廟に埋葬 Pari Khān Khānumら, 宮中の女性がレザー廟参詣	1551 'Alī Sulṭān Dhū al-Qadr
1555 アマシヤの和議	1555 Ḥasan Sulṭān Rūmlū

1557	Sulṭān Muḥammad Mīrẓā, レザール廟参詣 ホラズムのスルタンら, レザール廟参詣	1556	Sulṭān Ibrāhīm Mīrẓā <Aḥmad Sulṭān Afshār>
1558	Sām Mīrẓā, レザール廟参詣		
1562	Sām Mīrẓā, マシユハド統治を要望 Sulṭān Ḥusayn Mīrẓā, レザール廟参詣	1563	Pīr Ghayb Sulṭān Ustājīlū
1564	Pīr Muḥammad Khān Uzbek が侵攻するも帰還 近郊に侵攻した 'Alī Sulṭān Uzbek を撃退	1566	Sulṭān Ibrāhīm Mīrẓā
1567	'Abd Allāh Khān Uzbek のホラーサーン侵攻	1567	Shāh Walī Sulṭān Dhū al-Qadr
1571	マシユハドの王子ら, 宮廷に召喚される	1574	Walī Khalīfa Shāmlū
1576	Ṭahmāsp 死去, Ismā'il II 即位 Ṭahmāsp の遺体をレザール廟に埋葬	1576	Murtaḍā Qulī Khān Purnāk Turkmān
1577	Ismā'il II 死去, Sulṭān Muḥammad 即位		
1578	Ismā'il II に殺害された王子らの遺体をレザール廟に埋葬 Jalāl Khān Uzbek の侵攻, Murtaḍā Qulī が撃退		
1580	'Alī Qulī Khān Shāmlū, Murshid Qulī Sulṭān Ustājīlū らの侵攻, 数カ月間の包囲の後撤退		
1581	'Alī Qulī Khānらの侵攻, マシユハド荒廃		
1583	Sulṭān Muḥammad と Ḥamza Mīrẓā, レザール廟参詣 Murshid Qulī Khān が統治権を Salmān Khān から奪 取, 'Abbās の名でフトバを詠み, シッカを発行	1583	Salmān Khān <Shāh Qulī Sulṭān Ustājīlū> ²⁾ Murshid Qulī Khān Ustājīlū
1585	'Abbās Mīrẓā を連れて 'Alī Qulī Khān が侵攻, Murshid Qulī は応戦中に王子を獲得し, 即位させる		
1587	Murshid Qulī Khān, 'Abbās を連れてカズヴィーンに 進軍, 'Abbās, カズヴィーンにて即位	1587	Ibrāhīm Khān Ustājīlū
1588	'Abd Allāh Khān Uzbek の侵攻, 2カ月間の包囲の後 撤退, ホラーサーン一帯食糧難 'Abbās はマシユハドに入城するが, 退却	1588	Ummat Khān Ustājīlū
1589	'Abd al-Mu'mīn Khān Uzbek の侵攻, 数カ月間の包囲 の後に占領, 以後10年間シャイバーン朝支配	1589	[U] Khudāy Nazar Bī
1596	Ṭahmāsp の遺体をレザール廟から移す	?	[U] Abū al-Muḥammad Bī
1598	'Abd Allāh Khān と 'Abd al-Mu'mīn Khān 死去 'Abbās, マシユハド入城, レザール廟に参詣	1598	[S] Būdāq Khān Chigānī

主要史料として挙げた諸史料に依拠し作成。

・[S]=サファヴィー朝 [U]=ウズベク族(シャイバーン朝) [T]=ティムール朝
・<>内は師傅(*jala*)職に就任していた者であり、実質上の統治者。

1) 951/1544年の Ilumāyūn 来訪時のマシユハド統治者。Afḍal のみ、Ighūt Beg Ustājīlū
と記す[Afḍal, II:123a]。

2) Shāh Qulī Sulṭān は、Salmān Khān の師傅職にはあったが、ジャームの統治権を与
えられており、マシユハド統治には介入しなかった。

んだキシルバーシユ軍を追撃すると同時に、同じく廟内に避難していたサイイドやウラマーなどの住民を含む数千人を殺害した。その後、三日間の略奪期間を設定し、レザー廟の財産を略奪した。

このように、一六世紀末のウズベク軍のマシユハドにおける征服時の対応は、一六世紀初頭の対応、すなわちキシルバーシユ軍のみを攻撃対象とし、サイイドを中心としたマシユハドの有力者を尊重すると共に、レザー廟にも参詣するといふ穏当な対応とは様相を異にしているのである。

シャイバーン朝によるマシユハドにおける征服時の対応が大きく異なったのは何故か。この問いに対する解答を得るためには、半世紀に亘ってマシユハドを支配したサファヴィー朝政権による宗教政策と、その結果として生じたマシユハドの諸状況の変化を明らかにせねばならない。

そこで本稿では、まず第一にサファヴィー朝によるマシユハド支配の実態を、サファヴィー朝が行った軍事的・経済的庇護政策、及びその他の諸政策の点から考察する。次いで一六世紀に新たに移住してくるウラマー層によるマシユハドの都市社会の変化に視点を移し、彼らによりマシユハドのシニア派化が促進されたことを明らかにする。そして最後に、当時のサファヴィー朝のシニア派信仰とはどのようなものであったのか、ということにも言及しつつ、シニア派化の進んだマシユハドへの 'Abd Allah Khān 率いるウズベク軍の侵攻について考察する。

本稿によって、現代に繋がるイランのシニア派化において、サファヴィー朝が果たした役割とその意義の一端を明らかにすることができると思われる次第である。

- ① マシユハドの歴史・地理及びレザー廟の各建築物などの紹介として、
 A. Mūtamīn, *Rahnama-ye Tarīkh wa Tawsiḥ Dabāh-i Wīlāyat-madr-i Rīdāwī*, Mashhad, 1348 [以下 Mūtamīn 1348 年略記]；
 A. 'Uthānī, *Tarīkh-i Āstān-i Quds-i Rīdāwī*, 2 vols. Tehran, 1371；
 "Meshhed", *Encyclopaedia of Islam* 1st. ed.； "Āstān-e Qods-e

- Kazawī", *Encyclopaedia Iranica* などが挙げられるが、何れも概説の域を出ていない。また、ティムール朝期には、レザー廟の諸施設の建設が盛んとなったが、それらについては L. Golombek and D. Wilber, *The Timurid Architecture of Iran and Turan*, Princeton, 1988, 328-336 が参考になる。

- ② 当時の抗争については、M. B. Dickson, *Shāh Tahmāsb and the Uzbeks (The Duel for Khurāsān with 'Ubayd Khān: 930-946/1524-1540)*, Princeton University Ph. D. Dissertation, 1958 [以下 Dickson 1958 と略記] が詳しい。タフマーブ期のマシュヘドを巡る抗争は前後の経緯も含めて、同書の八五—一〇五、一四二—一六五頁を参照されたい。
- ③ Mu'tamin 1348, 226. 一方、マシュヘドの住民はサフアウイ朝、シャイバーン朝双方に帰順を示しており、当時、彼らにとって重要であったのは、支配者の信奉する宗派の相違ではなく、その所有する軍事力であった。このようなマシュヘドでの有力者たちの動向は、同時期のクラートでの動向と全く同様である。シャイバーン朝、サフアウイ朝両政権の支配を抵抗することなく受け入れた当時のクラートの状況については、久保一之「十六世紀初頭のクラート——二つの新興

主要文献とその略号

- Ā'in: "Ā'in-i Shāh Tahmāsb Šafawī dar Qānūn-i Sālṭanat", *Bar-yashtā-yi Tārīkhī* 7-1 (1351)
- 'Abbās: *Shāh 'Abbās -Majmū'a-yi asnād wa mukātibātāt-i tārikhī hamrah bā yādāshthā-yi tafzīlī*, ed. 'Abd al-Ḥusayn Nawā'ī, 2 vols. in 3 parts. (Tehran 1352)
- Afḍal*: Faḍlī Khūzānī, *Afḍal al-Tawārīkh*,
Afḍal I: ms. Library of Eton College No. 172, *Afḍal* II: ms. British Library Or. 4678
- Aḥsan*: Ḥasan Beg Rūmlū, *Aḥsan al-Tawārīkh*, ed. 'Abd al-Ḥusayn Nawā'ī (Tehran 1357)
- 'Alī Ra'īs: Sayyidī 'Alī Ra'īs, *Mir'āt al-Mamālik*, ed. Ahmed Jevdet (Istanbul 1313/1895)

王朝の支配——』『史料』七一一(一九八八)以下、久保一九八八の略記)を参照されたい。

- ④ Shaybānī Khān のクラート参論については、Faḍl Allāh b. Rūzbihān, *Mihmān-nāma-yi Bukhārā*, ed. M. Stūde, Tehran, 1341, 336-341 にその記述がある。おだの問題についての Haarman の論争も参考になる [U. Haarman, "Staat und Religion in Transoxanien im frühen 16. Jahrhundert", *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 124-2 (1974) 349]。
- 'Ubayd Allāh Khān のクラート参論については、Dickson 1958, 147-148 を参照されたい。
- ⑤ 本稿では、() は語の説明に、[] は筆者による語の補いに用いる。また、史料中イマームの後に記される賓語等は、必要と思われる場合以外は省略した。

- Firdaws*: 'Alā al-Mulk Shūshtarī, *Firdaws dar Tārīkh-i Shūshtar wa Baykhī az Mashāhīr-i ān*, ed. Mir Jalāl al-Dīn Ḥusaynī Ur-mawī (Tehran 1352)
- Ḥabīb*: Khwāndamīr, *Tārīkh-i Ḥabīb al-Siyar fī Aḥbār Afrād al-Bashar*, ed. Jalāl al-Dīn Humā'ī, vol. 4. (Tehran 1353)
- Kaempfer: Engelbert Kaempfer, *Am Hofe des persischen Großkönigs 1684-1685*, ed. H. Erdmann (Tübingen 1977)
- Khāqānī*: Walī Qulī Shāmlū, *Qīṣaṣ al-Khāqānī*, ed. Sayyid Ḥasan Sādāt Nāshirī, vol. 1. (Tehran 1371)
- Khulāṣat*: Qāḍī Aḥmad al-Qummī, *Khulāṣat al-Tawārīkh*, ed. Iḥsān Ishrāqī, 2 vols. (Tehran 1359, 1363)
- Maṭla'*: Muḥammad Ḥasan Khān Marāghī, *Maṭla' al-Shams*, vol. 2. (Tehran 1301)

Membre: Michele Membré, *Mission to the Lord Sophy of Persia*

(Teheran-Qum 1390-92)

(1339-1342), trans. A. H. Morton (London 1933)

Sulṭānī: Sayyid Husayn Ashtarābādī, *Tarīkh-i Sulṭānī az Shaykh*

Murīnīn: Nur Allah Shūshutari, *Majālis al-Murīnīn*, ed. Hajji

Ṣaḥīḥ tā Shah Ṣaḥī, ed. Ḥsān Ishrāqī (Teheran 1364)

Sayyid Ahmad, 1 vol. in 2 parts (Teheran 1375)

TAA1: Iskandar Beg Munshi, *Tarīkh-i Ḥām-ard-yi Abbāsī*, ed.

Nuḡṭwat: Mahmūd Afshutā-yi Naḡanzi, *Nuḡṭwat al-Āḥar ji Dhīkr*

Irāj Afshar, 2 vols. (Teheran 1350)

al-Akhyār, ed. Ḥsān Ishrāqī (Teheran 1350)

Tahmasb: *Shah Tahmasb Saḡawī - Majmū'a-yi asnaḍ wa muḥabābah-tai-i tarīkhī hamrah bā yaddashūhā-yi taḡfīlī*, ed. 'Abd al-Ḥusayn

Qū: Mirzā Muhammad Tannūkābūnī, *Qisās al-'Ulamā'*, ed. Āqā-yi

Nawā'i (Teheran 1350)

Hajji Sayyid Mahmūd Kitābchī (Teheran n. d.)

Tahmīnat: 'Abd Beg Shirāzī, *Tahmīnat al-Akḥbār*, ed. 'Abd al-Ḥusayn

RJ: Muhammad Baqir Khwānsārī, *Rawḡat al-Jannāt ji Ahwāl al-*

'Ulamā' wa'l-Salātī, eds. M. T. Kāshī and A. Ismā'īlyūn, 8 vols.

'Ulamā' wa'l-Salātī, eds. M. T. Kāshī and A. Ismā'īlyūn, 8 vols.

I サファヴィー朝政権とマシユハド

シーア派を標榜したサファヴィー朝政権にとり、マシユハドはどのような意味を持ち、どのような存在であったのか。まずこの点を、サファヴィー朝がこの聖地に対して行った具体的な政策を見ながら考察しよう。

マシユハドがサファヴィー朝支配下にあった一五三二年から一五八九年までの五〇年間は、ほぼサファヴィー朝第二代君主シャー・タフマースプ Shah Tahmasp (在位一五二四—一五七〇)の治世と重なる。それ故、サファヴィー朝側のマシユハドに対する政策として、主にタフマースプの採った政策を中心に検討することとする。^①

(1) レザー廟を中心とした対マシユハド庇護政策

軍事面では、まず第一に、サファヴィー朝支配下の他都市と同様に、部族単位でその地に居住するキジルバシー部族が配置されており、部族長であるキジルバシー・アミールがハーキム(地方長官)として、一族を率いてこの都市の防衛に携わっていた(年表参照)。ホラーサーンに位置するマシユハドには、東方からウズベク軍が度々侵襲したが、ウズベク

軍とキジルバーシユ軍との攻防を年表を参考に見ていくと、一五二六年や一五二九年には、Ubayd Allah Khan の侵攻に対して駐屯していたキジルバーシユ部族が抗しきれず、ウズベク軍のマシユハド占領を招いていたのが、一五三一年には、当時のハーキムが近郊のアミールと協力してウズベク軍を撃退し、また一五三五年には、Ubayd Allah Khan 自身の侵攻に対して、不在であったハーキムに代わって妻子が籠城の指揮をとってマシユハドを守り抜いた。キジルバーシユ軍がウズベク軍を撃退するようになった一五三〇年代以降はマシユハドの防衛力も安定し、有能な支配者である Ubayd Allah Khan を失い急速に弱体化したシャイバーン朝勢力による被害は最小限にくい止められた。サファヴィー朝がマシユハド支配を確実なものとするためには、このようなキジルバーシユの軍事力が必要であったことは言うまでもない。

しかしながらマシユハドにおいて重要なことは、外敵から都市を防衛するキジルバーシユ部族とは別に、マシユハドの心臓部であるレザール廟にコルチが配備されていたことである^③。

聖廟に配備されるコルチの存在は、イラン国内の他の聖廟では未だ確認されていないが、マシユハドでは、タフマースプの甥の Sultan Ibrahim Mirza がハーキムに任命された時（一五五六年）に初めて確認される。この王子は、五〇〇人の各部族のアミールの息子たちとテヘランのコルチを従えてマシユハドに赴任したというが [Khulāṣat, 640]、この事実を裏付けるように、王子の統治期間中にマシユハドを訪れた Sayyidi Ali Rais は、二〇〇人の鎖帷子をつけたコルチが自分を逮捕しにやってくるたと述べている [Ali Rais, 77-78]。さらに、一五七八年には、Jalal Khan Uzbek の侵攻に対して、ハーキムの Murtaḍā Quli Khan は自軍のキジルバーシユ部族とマシユハドのコルチ、あわせて一五〇〇人ほどで迎え討つたという [Khulāṣat, 673]。これらの事実から、マシユハドでは、武器を携帯し、時には外敵の侵攻に対してキジルバーシユ軍と共に応戦する数百人規模のコルチが、主としてレザール廟及び町中の治安維持に携わっていたと言える。次に、経済面を見ていくと、コルチに見られる軍事面での特別な保護のみならず、経済面でもレザール廟は格別な援助を受けていたことがわかる。

タフマースプは吝嗇家であったと言われているが、聖地には惜しみなく私財を費やした。彼は、まず、一五二八年のジャームでのウズベク軍との戦いで勝利できたことに感謝して、「レザー廟のドームの屋根を黄金にする」という誓願 (nazm) を行った [Nūqawāt, 14]。そしてこの誓願の実行にあたり、王室の財宝庫から純金と金貨を捻出し [‘*Tāmīnāt*, 75]、ドームに六三マン (mann)、またミナレットに一七マンの金を費やして [Nūqawāt, 15]、墓廟のドームとミナレットに黄金を箔した。^⑥

さらに、タフマースプは、レザー廟の諸経費のために、奉納やワクフ (寄進) の形で資金を提供したが、中でもレザー廟の毎日の飲食費について、Nūqawāt に次のような記述がある。

信仰の避難所たる王 (タフマースプ) は、毎年献上品や収入の中から総額八万トゥマンを、偉大なるメッカ、栄光あるメディナ、無謬なるイマーム様たちの神聖なる殉教地、高貴なるイマームザーデーたちの墓などの聖なる場所や祝福されたる敷居に送っていた。その中でも毎日五トゥマンが、服従を要するイマーム、Ah b. Musa, al-Rida 様の管轄 (sarkat) の食物や飲み物の消費に定められた。そしてこの五トゥマンを味な食事に費やし、朝晩、清掃人 (farrashan) や奉仕人たち (khiḍmatkārān) が貴人の様式でピクルスや青菜を添えて、サイドやウラマーや参詣者やハーディムたちからなる諸階層の人々に提供していた。 [Nūqawāt, 15]

Nūqawāt のこの記述は、著者が同郷の王室税務官 (*mustawfi-yi khāṣṣa wa daftardār-i khāṣṣa-yi shah*) から直接聞いた話であり、信頼性に富む。この中で特記されているレザー廟の一日五トゥマンの飲食費とは、これのみで年間二千トゥマンという莫大な額に達するのである。そしてこのような飲食費の他にも、ハーディムや教師たちの俸給、及びサイド、ウラマー、学識者、困窮者たちにかかる諸経費など、レザー廟に関係するあらゆる支出が、王室の設定したソニルガルやワクフ地から賄われていたと、^⑦ [‘*Tāmīnāt*, 149]。

以上のような奉納金すべてを合算すると、相当な金額がレザー廟に対して王朝側から援助されていたことになり、君主タフマースプのこの聖地への関心の高さが窺われるのである。

(2) シーア派信仰普及政策

タフマースプのマシユハドへの関心が特に強まったのは、一五五五年、オスマン朝との間に半世紀に亙る抗争を終結させる和議が締結された時のことである。この年懸案の対オスマン朝問題を終結させ、アゼルバイジャンから帰還したタフマースプの心境を史料は以下のように記している。

万民の王(タフマースプ)の心には以下の方がよぎった。「日に日に明らかになるこれらすべての援助や恩寵は、イマーム様たちの聖域の聖なる内面から生じているのである。……とりわけ 'Ali b. Musa al-Rida 様の光輝く聖廟と香高い殉教地は、禁じられた行為 (manhiya) の埃や望ましくない行為 (makruhāt) の汚れから免れ清らかでなければならぬ。」 [Khulāṣat, 380]

こうしてマシユハドに目を向けたタフマースプに、「マシユハドのハーキムたちの怠慢により、聖地管理の基本が等閑にされている」という知らせが何度も入った [Khulāṣat, 380]。そこで、彼は当時のハーキムを罷免し、新たに「熱心な性質の人物」を選んだ。その結果、タフマースプのただ一人の同腹の弟である Bahram Mirza の息子、Sūltān Ibrāhīm Mirza がハーキムとして任命された。マシユハドへの王族の配置はこの時が初めてである上、この王子がタフマースプの寵愛する甥であり、幼少時に地方都市へ派遣される王子とは異なり、当時既に成人していたことから、タフマースプがマシユハドを要地と見なしていたことが推察できる。^⑩

Ibrāhīm Mirza は大勢の画家や詩人などの芸術家を保護していたことで有名であり、^⑪ その芸術を愛好する気質から、彼のシーア派信仰の弱さを指摘する研究も存在する。^⑫ しかし、この王子は「ウラマーとの会話は最良の宝物」との言葉に従って、大半の時間をウラマー (ulama-yi dānish) や哲学者たち (fakama-yi adāfūn-hunar) との交流に費やし、時には理性や伝承による学問 (ulūm-i ma'qūl wa manqūl) の習得に励んだと言われている [Nuḡḡat, 48]。また、イスマーイール二世 Shāh Ismā'īl II. (在位一五七六一一五七七) が即位した後、宮廷でシーア派ウラマーと交流する王子の様子が確認さ

れる [Zafar, 214]。それ故、彼が十分な学識を備え、シーア派教義にも通じていたことは疑いの余地がないことであろう。^④
この王子の赴任早々にマシュハドを訪れたオスマン朝の海軍提督 Sayyidi 'Ali Rais は次のような事件に遭遇した。

九六四年ムハッラム月一日（一五五六年一月四日）、〔私は〕 Mashhad-i Khurasan にやぶづいた。……Bahram Mirza の息子である Ibrahim Mirza がその地の統治者 (sulṭān) であり、シャール（タフマースプ）の息子 Sulaymān Mirza もその地にいた。彼らと……会見し、王子たちからシャールの所に行くため人を求めると、了承され、宴が開かれた。会話 (muṣāḥabat) の最中、「王子は」私に「アラー様とアブール・バクル、ウマル、ウスマーン様たち——彼らに至高なる神の満足あれ——」のことで、彼らのカリフ位 (khalīfat) と優越性 (iltuvvīyat) についてあなた方と議論しよう」と言って幾つかの質問をし、答えを求めたので、私の方は「返答は最も愚かなことである」を実践し、黙っていると、何度も非常にせかされたので、……「私たちはここであなた方と論争するために来たものではありません。今日は質問も返答もできません」と言った。 [‘Ali Rais, 76-77]

この論争からようやく抜け出した ‘Ali Rais の一行は、しかしながら、オスマン朝からシャイバーン朝に向けて派遣された密使ではないかとの嫌疑をかけられ、翌朝二〇〇人のコルチに捕らえられる。そして所持品をすべて没収され、監禁されるのである [‘Ali Rais, 78]。一行が解放されるのは、‘Ali Rais の自作した詩がアラーをはじめとする一二人のイマームに関連したものであったことから、彼の思想がシーア派信仰に近いと判断されたためである。さらに当時のムタワッリが王子に取りなして、十日後、ようやく彼らは解放された [‘Ali Rais, 83]。

この事件から明らかのように、王子はオスマン朝からの参詣者にシーアースナ論争を挑み、ついには逮捕監禁まで行ったのである。ここからこの王子のシーア派信仰の弱さは見えず、むしろ熱烈なシーア派信徒である姿勢が浮かび上がる。堅固なシーア派信仰を持つ王子のこのような態度は、マシュハドの綱紀肅正を目指したタフマースプの期待に沿うものであったのではなからうか。タフマースプが王子を信頼していたことは、タフマースプの異母弟であり、反乱を起こした Sam Mirzā がマシュハド統治を希望した際に、一旦は受理されたものの、「Sam Mirzā がホラーサーンにいることは国

表1—16世紀のレザ—廟のムタワッリー—就任表

	就任年	ムタワッリー名	出身地	サイイド	備考	典拠
①	?	Mir Niẓām al-Mulk	マシュハド	レザ—家	1528—1537年頃に担当	Af. II: 38a, 43a, 45a, 97a
②	1540 (?)	Khwāja Amīr Beg Kajajī		—	ホラーサーンのワズィール兼任 1551年投獄	A. 457-8
③	?	Mir Darwish Beg	?	サファヴィ—家 (?)	ニスバがサファヴィ—	Kh. 974
④	1554	Khalifa Asad Allāh	イスファハーン	○	10年間就任, シャイフル・イスラーム兼任, 学識者, 信仰心厚い, 表2—②	Kh. 438-9, 974
⑤	1563	Mir ‘Abd al-Wahhāb	ジュ—ジュタル	フサイン家	後, ディズフルの長官 父兄弟ともに宮廷で重用される*	Kh. 439 T. 149
⑥	1564	Mir Sayyid ‘Alī	コム	レザ—家	マシュハドのワズィール兼任, 後, カズ ヴィ—のワズィール, 王領地の管理者	Kh. 446, 558
⑦	1567	Mir Abū al-Walī	シーラーズ	インジュー家	<i>wājibī</i> 担当, すぐに辞任 狂信的なシーア派教徒, 後, カーディー・ アスカル, 20年間サドル	Kh. 460-1, 990 T. 148, 1089
⑧		Mir ‘Abd Allāh	?	△	<i>sunnatī</i> 担当	Kh. 460-1, 990
⑨	1567 (?)	Mir ‘Alī Mufaḍḍal	アスタラーバード	○	おそらく⑦の後任 二期(⑨)合わせて15年間就任	Kh. 581, 732, 899
⑩	1574	Mir Kamāl al-Dīn	アスタラーバード	○	タフマースプ薨去時まで就任 <i>wājibī</i> と <i>sunnatī</i> を各々が担当 (Kh と T で逆)	Kh. 581 T. 149
⑪		Mir Abū al-Qāsim	イスファハーン	ハリ—ファ家		Kh. 581 T. 149
⑫	?	Mir ‘Abd al-Karīm	?	△	1580年戦死	S. 112

1580	Mirzā Shukr Allāh	イスマハンーン	—	ホラーサーンのフスナール ムタワッリーに任命された年に死去	Kh. 713 T. 162-3
1582	Mir 'Alī Mufaddal	フスタラーバード	○	二度目の就任 (㊸), 1589年殉教	Kh. 732
1589—1598 シヤンバーン朝支配期					
1598	Qādi Sulhān	トルバンチ・ハイダ リー	ムサー家 後、サドル	1617年まで20年間就任	T. 568, 752, 928

史料略号 (表 1・2 共通) : A = *Aḥsan*, Al = *Alḡal*, F = *Firdaws*, Kh = *Khulāṣat*, N = *Nuḡawāt*, S = *Sulḡānī*, T = *T. Aḡḡ*.
 史料中にサナイドとして名前の挙がる者に○を、また、サナイドとは書かれていないがサナイドを示す「Mir」 という称号を持つ者に△を付した。
 * 兄弟の 'Alī もサドル辞任後にムタワッリーに就任したというが [Firdaws, 22, T. 444, 149], *Khulāṣat* では確認できず、何れかの史料が兄弟の名を取り違えている可能性もある。

家にとり相応しくない」との理由から却下された事実との比較からも明らかであろう。^㊸

一方、Ibrahim Mirzā のハーキム職への任命と相前後して、タフマースプはレザール廟のムタワッリー (*mutawallī*) 職においても新たな方向を打ち出した (表 1 参照)。レザール廟の諸管理に携わるムタワッリーは、サファヴィー朝以前からのマシュハドの要職の一つである。ティムール朝期には、レザール廟の管理はマシュハドのムサー家やレザール家のナキーブ (サイイドの長) が担っていた [Habib, 333]。一六世紀のこの職については未だ十分に明らかにされてはいないが、一六世紀初頭にムタワッリーとして名前の挙がる Mir Nizām al-Mulk Ridāwī (表 1 ㊸) はマシュハドのレザール家のサイイドであることから、サファヴィー朝期に入ってもマシュハドのサイイドが廟の管理を行う状況は変わらなかったと考えられる。^㊸ しかしながら、サファヴィー朝によるマシュハド支配が安定した頃から、レザール廟のムタワッリーの任免は王によって為されるようになった。タフマースプ自身による任免の背景には、前節で見たように、彼がレザール廟に対して種々の寄進を行うようになったことが理由として挙げられよう。すなわち、王自身がワクフを行ったため、その管理者は王が任免する権限を有したのである。

ここで注意すべきは、最初の被任命者であろう Kajafī (表1—②)以降、タフマースブが任免するようになってからは、マシュハド出身のサイイドがムタワッリー職に就任することはなくなり、代わってイラン国内のサイイドが就任している点である。特に、タフマースブの関心がマシュハドに向けられた一五五四年以降は、Khalifa Asad Allāh (表1—④)や、Mir Abū al-Walī (表1—⑦)など、シーア派で名高いサイイドたちが任命されている。

これらの職は、Mir Abū al-Walī と Mir 'Abd Allāh (表1—⑦と⑧)の就任時(一五六七年)に、布施などの臨時収入を管理する *wajibi* と、宴やハーデーム、教師の俸給など王室財産から賄われる諸経費を管理する *sumnat* に二分割され、肥大化している。また、時代が下るにつれて、サドルなどに昇進する者も多く現れている。レザール廟のムタワッリー職は、サファヴィー朝の諸官職の中でも重要性を増していったと考えられる。¹⁴⁾

以上の如きハーキム職への王族の登用や、レザール廟のムタワッリーの任免に共通して見られることは、タフマースブがマシュハドにシーア派の人物を意図的に送り込んだということである。そこにはシーア派信仰の浸透を目指すシーア派政権の思惑が表れている。そのことを最も顕著に示す政策は、当時、シャイフル・イスラームなどの宗教的官職の任免に、君主自らが関与し、正統なシーア派ウラマーを導入したことであるが、これに関しては次章で扱うことにしたい。

そしてこれらのサファヴィー朝政権が直接介入した人事以外にも、タフマースブは、マシュハドを筆頭とするシーア派の都市で四〇人ずつの男女の孤児に衣服と必要な物を提供し、男女の敬虔なシーア派教師や誠実な世話人を任命して孤児に教育を施すという政策を行っていた [ZAF, 123]。この政策からは、彼が孤児に注目し、シーア派信仰を地域社会や民衆にも浸透させようとしていたことが理解される。

以上の考察により、イマームの聖廟を有するマシュハドに対してサファヴィー朝が別格とも言える軍事的・経済的庇護を与えていたこと、及びそれらの庇護の一方で、王朝側は自ら掲げるシーア派信仰を普及させるべく、シーア派の人物を

意図的にこの聖地に送り込んでいることが明らかとなった。

ところで、タフマースプ時代に行われたこれらの庇護及び政策は、隣国のスンナ派王朝であるオスマン朝やシャイバーン朝との対外的な政治状況の枠組みの中で考えなくてはならない。一六世紀のサファヴィー朝は、東方ではホラーサーン地方を掌握したものの、西方ではスレイマン大帝のもとで圧倒的に優勢な立場にあったオスマン朝によって、ナジャフやカルバラ、カーズィマインといったシーア派聖地を含むイラク地方を奪われ（一五三四年）、その状態のまま一五五五年にオスマン朝と和議を締結した。すなわち、サファヴィー朝政権は、これらの対外戦争による東西両国との領土の確定により、イラン国内のシーア派聖地に目を向けることを余儀なくされ、その結果、イマームの聖地の中では唯一残されたマシュハドにその関心が集中したと言えるのである。

そして、マシュハドはイラン国内で最も重要な聖地として様々な恩恵を享受する一方、シーア派信仰の国内への浸透を目指すサファヴィー朝政権にとっての「象徴」的存在としての役割を担うようになっていった。Khulasat には、大略次のような記事が載せられている。

タフマースプはホラーサーン遠征に赴く度にレザー廟を参詣していたが、一五三七年の第四次ホラーサーン遠征からの帰路には、新たに「以後毎年レザー廟に参詣しよう」という誓願を行った。もっともこの誓願は彼が死ぬまで四〇年間一度も実行されることはなかった。しかし彼は毎年代理人 (*nā'ib*) を任命し、年末に (*dar akhīr-i sāl*)、参詣のためにマシュハドに派遣していた [Khulasat, 1002]。

先にも述べたように、この誓願の行われた一五三七年には、イラク地方は既にオスマン朝の支配下にあった。言うまでもなく一五一七年以降、メッカ、メデイナの両聖地もまた、オスマン朝の支配下にあった。そのためバグダード近郊のシーア派聖地のみならず、イスラム教徒の巡礼地のメッカにもタフマースプが直接巡礼することはもはやあり得ないことであつた。この事実を踏まえて今一度先の記事を見てみると、その中で言われている「年末 (*dar akhīr-i sāl*)」とは、「ヒジ

ムラ暦の最終月、すなわち巡礼月であるズー・アルヒジジャ月を指すことは明らかである。つまりタフマースブのこの誓願は、メッカ巡礼の代替としてのマシユハド参詣を意図したものであり、サファヴィー朝領内においてマシユハドが最も重要な聖地と見なされていたことを裏付けるとともに、メッカの代替としての役割をマシユハドに与える政権側の意向もまた看取できるのである。^②

一六世紀のマシユハドは、以上見てきたサファヴィー朝政権による数々の庇護や政策を経て、スンナ派教徒も参詣した聖地から、サファヴィー朝というシーア派を標榜した王朝集団にとっての「シーア派聖地」となっていくのである。^③

① 初代イスマーイールがマシユハドにどのような関心を寄せていたのかは、現段階では確認し得ないが、彼はマシユハドよりもむしろ、ナジャフやカルバラなどイラクの方に関心を向けていたようである。例えば、*Habib*, 495-496, 508 など。

また、タフマースブの死後、マシユハドを含むホラーサーン一帯はキシルバースィシュ諸部族の内訌による混乱期に入り、サファヴィー朝君主によるマシユハドへの政策は殆ど確認されない。

② 各都市のキシルバースィシュによる統治については、K. M. Röhborn, *Poustan und Zentralgeualt Persiens im 16. und 17. Jahrhundert*, Berlin, 1966 [以下 Röhborn 1966 と略記] が参考になる。

③ *TAKA*, 203. 王に直属する近衛兵としてのコルチの役割については、羽田正「コルチ考——十六世紀イランの近衛兵制度——」『史料』六七—三(一九八四)〔以下、羽田一九八四と略記〕で明らかにされており、氏もまたマシユハドにコルチがいたことについて注で触れておられる。

④ タフマースブの財産は金貨銀貨の現金のみで三八万トマンにのぼった [Sharaf al-Din Bidlisi, *Sharaf-Nāma*, ed. V. V. Volynskov, Zhenov, vol. 2, St. Petersburg, 1861, 251-252]。これはどの財産が

あったにもかかわらず、彼は十年以上もコルチに対して俸給を支払わなかった [羽田一九八四、一四一—一五]。

⑤ マンは約三キログラムに相当する。

⑥ *Mutamin* はドームの屋根を黄金にした時期をヒジュラ暦九三二(一五二五—二六)年としているが [Mutamin 1348, 10]、この年タフマースブはキシルバースィシュ諸部族の内訌によりホラーサーンへ赴いていないこと、この部族間抗争のためにマシユハドではハーキムが不在であったこと、その間隙をついて Ubayd Allah Khan がマシユハドに侵攻し占領したこと、など当時の状況に照らし合わせてみると彼の説は説得力に欠ける。しかるに、タフマースブ時代に書かれた *Tahmilat* では、タフマースブは「九四〇年の午 [刊本の「辰(Mey)」は誤り] の歳 (一五三四年)」にレザール廟に参詣し聖廟のドームを金で整備しよう命じた、と記されている [Tahmilat, 75]。この記述の一五三四年の方が信頼性があり、正しいと思われる。尚、このドームとシナレットの金は、一五八九年にウスベク軍によって略奪された [TAKA, 414]。アッバースはマシユハド再征服後にこのドームを、タフマースブ同様、金で修復した [Majlis, 127]。

⑦ タフマースブは、財宝庫から現金で五一六〇〇〇トマンをレザール

廟、フアーティマ廟、テハランの Abd al-ʿAzim 廟、サファイー廟などに奉納として送り、さらにソネルガルやワフナ地方から一万トゥマンを食事や衣服用に送っていたと云う [Khuḏāsāt, 597-598]。次に引用する Naqāwāt とは数字が異なる。

⑧ 当時、一マンの小麦の値段が四〇ディナールであったというから [Naqāwāt, 57]、一日に二五〇マンの小麦が購入できる金額であった。

⑨ I. Afshār の校訂では、「sādāt wa ʿumalāʾ wa fudalāʾ wa arḥāb-i-istihāq」となっているが、京都大学附属図書館所蔵の写本等に基づき、「ʿumalāʾ (徴税官)」ではなく「ʿulamāʾ」と判断した。

⑩ サファヴィー朝時代に、重要な地方都市のハーキムとして王族が派遣されていたことについては、Rönnbom 1966, 40-44 を参照されたい。尚、翌年、タマンの息子 Sultān Sulaymān Mirzā (四歳) ⁴⁰ khāzin-bāshī としてタマンに赴任した [Khuḏāsāt, 391]。

⑪ Ibrāhīm Mirzā の画家や能書家に対する保護については、A. Welch, *Artists for the Shah: Late Sixteenth-Century Painting at the Imperial Court of Iran*, New Haven and London, 1976, 150-158 に簡潔にまとめられている。

⑫ C. J. Beeson, *The Origins of Conflict in the Safawi Religious Institution*, Princeton University Ph. D. Dissertation, 1982 [C. J. Beeson 1982 と略記] 124. 彼女は王子のベレンと統治の期間を正確に把握してないために、王子の罷免の理由など種々の点で見当違いのことを述べている。

⑬ 父親が王子のワズィールであったが Qummi は、学識者と交流する日を設ける王子のメンションでの生活を伝えている [Khuḏāsāt, 385]。

⑭ Kaempfer によると、「王子の教育」として、サファヴィー家の王子たちは、シーア派教義やムハンマドと二人のイマームたちの生涯

や奇跡などを学ぶ一方で、シーア派であるヘルシアとスンナ派であるオスマン朝の間で争点となっている問題が徹底的に論じられるという [Kaempfer, 35]。

⑮ Sam Mirzā は一五二一—一五三〇年及び一五三三—一五三五年の間（ラートのハーキムであったが、一五三五年に彼の師傅であった Aghazīwār Khān Shamīn に担がれ、タフマースプに対して反乱を起こした。ほとんど謝罪したため赦され、アルダビールに居住したが、最終的にカフカヘ城へ投獄され、子供たちとともに殺害された [Zhu-lāzāt, 550-557]。

⑯ Ibrāhīm Mirzā はタフマースプの信頼を失って一五六七年に罷免されるが、それは同年の ʿAbd Allāh Khān Uzbek によるホラーサーン侵攻に際し、ホラーサーンの各地のアミールが結集して撃退する中、王子が「如何なる方法でも援軍を送らなかったのみならず」、「宴を聞き、悦楽に興じていた」 [Naqāwāt, 49] ためであった。この後王子はしばらくの間、タフマースプから疎んじられた。

⑰ Muʿtamin がレザー廟のムタワッリー職に就任した者を列挙しているが、十六世紀の人々については極めて不十分である [Muʿtamin 1348, 224-224]。尚、ムタワッリーの職務内容については、サファヴィー朝末期の ⁴¹ 著者が、Mirzā Rafīʿ al-Dīn Anṣārī, *Dustūr al-Mulūk*, ed. M. T. Danishpazhūh, I-IV, *Majāliya-yi Dānishkhada-yi Adabiyāt wa ʿUlūm-i-Insāni-yi Dānishghā-i-Tihān* 15-5/6, 16-1/2, 16-3, 16-4 (1347-48) [以下 DM と略記] II: 66-68 が参考になる。

⑱ 彼自身がナキーンであったかどうかは不明である。

⑳ サファヴィー朝末期には、レザー廟のムタワッリー職は、ムッラー・シ、サドルに次ぐ行政第三位の職種として挙げられている [DM, II: 64-70]。尚、アルダビールのサファイー廟では、ムタワッリーには Naʿsūm Beg Safavi や Sam Mirzā など主にサファヴィー家の者が

就任していた。Morton がタフマースブ時代のサフイー廟について考察したところ [A. H. Morton, "The Arabii Shrine in the Reign of Shah Tahmasp I", Iran 12, 13 (1974, 1975)]。

②0 *Sulaimi* はヒジラ暦九六三(一五五五—五六)年の出来事の中にこの政策を書き込んでいるが [*Sulaimi*, 87]、著者 Astarabadi が依拠している TAA には特に年代は記されていない。[TAA, 123]。このため、彼の言う九六三年という年代をそのまま信用することはできない。Ain の第六五条はこの政策が挙げられており、教師や孤児には各都市のハーキムを通じて国庫から衣服や食事が支給されたという [Ain, 137-138]。その他 *Khatasat*, 598 にも同様の記事がある。

②1 アスタラーバードのサイイドが代理人として任命されていた [Ain, 151]。

②2 イラン国内の他の聖廟とも比較・検討しなければならないが、特にコムの方サフイーマ廟について触れておくと、タフマースブ時代のフアーティマ廟は女性のための墓廟と考えられていたのではないかと思われる。十六世紀、レザール廟には多数の王族が埋葬され、王家の聖廟

II 一二イマーム派シーア派ウラマーの移住

前章ではサファヴィー朝政権の対マシユハド政策を中心に検討したが、続いて、マシユハドの都市社会に目を向けた場合に看過することのできない、都市の有力者層について見ていこう。

本来、マシユハドの有力者層を形成していたのは、サイイドたちであった^①。しかしながら、サファヴィー朝期に入ると、外部から移住してきた人々により新たな有力者層が形成され、マシユハドの新興勢力としてサイイド以上に大きな影響を与えるようになった。サファヴィー朝期になって初めて確認される彼らは皆、一二イマーム派シーア派のウラマーである^②。

としての性格を持ち始めるが(後註参照)、コムに埋葬されるのは王族の中でも女性ばかりであり、男性はいない。カーシャル朝期以降と思われるコムが発展については、嶋本隆光「十九世紀のコム (Qum) 市——王朝の庇護と宗教都市の発展——」『オリエンツ』三〇—(一九八七)を参照されたい。

②3 タフマースブ時代から十六世紀末のウスベク軍による占領までの間を通じて、タフマースブを含む主要な王族 (Bahram Mirza、イスマーイル二世に殺害された王子たち) は、父祖の墓廟であるサフイー廟ではなく、レザール廟に埋葬された。タフマースブに反乱した *Shah Mirza* はサフイー廟に埋葬されていることから、当時、レザール廟に埋葬されることは特別なことであったと考えられる。

また、十六世紀には、大勢の王族がマシユハド参詣を行っていた(年表参照)。中でも一五四九年の *Parti Khan Khanum* の参詣は、彼女が生後一年しか経っていないことから、「お宮参り」的な性格があったのかも知れない [Aminian, 103-104]。

特に一六世紀後半には、彼らの存在がサイイドと並んで史料上に散見される。

加えて、TAMM のウラマー・リストによると、そこに見えるウラマーの大半がマッシュハドと関係を持っている。^③この点から見ても、社会的に重要な地位にあったサファヴィー朝期の一二イマーム派ウラマーとマッシュハドとの関係を見過ごすわけにはいかない。そこで以下、一二イマーム派ウラマーのマッシュハドへの移住の観点から、一六世紀のマッシュハドの都市社会の状況を考察する。

(1) 一二イマーム派シーア派諸学の中心地としてのマッシュハド

創設と同時に、サファヴィー朝君主はシーア派信仰をイラン国内に広めることを奨励し、一二イマーム派シーア派ウラマーを優遇した。最初期には、レバノンのジャバル・アール出身の 'Ali b. 'Abd al-'Ali al-Karaki と、フライン出身の Ibrahim b. Sulayman al-Qatifi の二人の学者が重要な役割を果たしたことは既に知られている。^④中でも al-Karaki はサファヴィー朝宮廷と密接な関係を持ち、イスマール Shah Isma'ili (在位一五〇一—一五二四) やタフマースブによって重用された。そして al-Karaki 以降、シャイフル・イスラームやピーシュ・ナマーズ (礼拝の導師) といった役職は、アラブ出身のシーア派ウラマーを中心として、君主によって任免されるようになった。^⑤

マッシュハドでシャイフル・イスラームやピーシュ・ナマーズとしてアラブ出身者の名が挙がるのは一六世紀後半のことであるが (表2—③④)、王朝側から任命される彼らの存在を待つまでもなく、シーア派政権下のマッシュハドではシーア派の学問活動が始動した。

サファヴィー朝期のマッシュハドで最初に活動が確認されるのは、先に挙げたアラブ出身の al-Karaki と al-Qatifi である。彼らは一五一〇年頃マッシュハドで論争を行った。^⑥その際 al-Karaki は、当時数々の点において非難されていたサファヴィー朝を弁護する立場をとり、マッシュハドで二書を執筆している。^⑦サファヴィー朝最初期の思想形成に非常に大き

表2—16世紀マシュハドで活動した主要な12イマーム派シーア派ウラマー

	名 前	没 年	出 身	前 職	マシュハドでの活動 (期間)	リスト*	備 考	出 典
①	Mir Mu'izz al-Din Muḥammad	1545-46	イスファハーン	サドル	教授(1537~1546)		al-Karaki に師事, al-Qaṭifi からイジャーズ	A. 405-6 RJ. I: 26
②	Khalifa Asad Allāh	1563	イスファハーン		シャイフル・イスラーム, ムタワッリー(1554~1563)		理性と伝承による学問に通曉, 表1—④	Kh. 438-9, 974
③	Shaykh Ḥusayn	1576-77	レバノン (ジャバル・アーミル)	カズヴィーン のシャイフル・イスラーム	シャイフル・イスラーム, 教授(1563~64頃)	○	Shahid-i Thāni に師事 Shaykh Bahā'i の父	T. 155-6
④	Mawlānā 'Abd Allāh	1589(殉)	シュージュタル		教授, アッパースの教師 (T~1589)	○	シーラーズ, アラブで学び, 法源論に通曉	T. 154, F. 64 Kh. 898-9 N. 264, 372-3
⑤	Mawlānā 'Abd al-Wāḥid	?	シュージュタル	ハイダル・ミールザーの教師	教授(T~?)		シーラーズで学ぶ ④の同輩	F. 53-61
⑥	Mawlānā Muḥammad Mushkak	1589(殉)	ロスタムダール		教授(1569頃~1589)		レザー廟の幾つかのマドラサで20年間教授	M. I: 101
⑦	Khwāja Afḍal al-Din Turka	1583	イスファハーン	カーディー・アスカル	教授(M~1583)	○	理性と伝承による学問に通曉, カーディーの家系 カズヴィーンで⑥に師事	T. 155 F. 60
⑧	Mawlānā Āqā Jāni	?	タブリーズ	タフマースブの教師	教授(1572~?)			Af. II: 211b, 266a-267a
⑨	Shaykh Faḍl Allāh	1589(殉)	アラブ		ビーシュ・ナマーズ (?~1589)	○	法学に通曉	T. 158

⑩	Shaykh Taj al-Din Hasan Dā'ud	?	フスタラー バード	シャイフル・イスマーム？ (?～1589)	○	後、ハーヂヤム・バツ、 警備長、幕府の鍵管理者	Kh. 900-1 T. 157-8
⑪	Shaykh Lutf Allah	1622	レバノン (マナス)	学生→教授(?～1589)	○	④に師事	T. 157, 1008
⑫	Qafī Nur Allah	1610(歿)	シエージュ タル	学生(1571～1584)	—	⑤に師事	F. 24-37
⑬	Mir Muhammad Baqr Damād	1630	フスタラー バード	学生(?～M)	△	al-Karakiの娘の子 ③に師事、アジュタレフ	T. 146-7 QU. 333

君主略号：T=Tahmāsp, M=Muṣṭafā Muhammad Khudābanda.

*7444 所載のタフマースプ時代のウラマー・リスト [7444, 154-158] に載っている者に○を付す。

尚、⑬は、ウラマーであるが、サイイド・リスト中に挙げられているため、△とした。

な影響を与えたこの二人のウラマーによるマシェハドでの論争が、マシェハドの二イマーム派シーア派諸学の起点となつたと考えられる。

では、実際にどのような人物が活動していたのか。一六世紀にマシェハドで活動した主要なウラマーの経歴を、第一世代(①②)、第二世代(③④⑤)、第三世代(⑥⑦⑧)の三グループの中から抽出して検討しよう(表2参照)。

〈第一世代〉

・Mir Mu'izz al-Din Muhammad b. Shāh Taqī al-Din Isfahāni (表2-①)

イスファハーンのナキープの家系に属す。イラーケ・アジャムの最も敬虔にして学識あるサイイドであり、一五二四年頃にはイスファハーンのシャイフル・イスマームであった [Habib, 608]。法学に精通し、法学関係の諸問題の大半を al-Karaki のもとで学び、彼に優遇された [Afsar, 405]。しかしその一方で、一五二二―二三年には al-Karaki の敵対者と目される al-Qatifi からイシジャーザ(教導許可)を受けつゝ [FJ, I: 26]。一五三二―三三年に al-Karaki の推薦によ

リサドル職に就任し、五年間サドルを勤め、その間にシャリーアの普及やビドア(異端)の排斥に尽力した [Alisan, 406]。
ある宮廷医師の讒言によってタフマースブの寵を失い、第四次ホラーサーン遠征の際にサドル職を罷免(一五三七年)されてからはレザー廟に居住し、信仰の諸学問 (ulum-i dmiya) の教導 (Itada) や礼拝に従事した [Alisan, 406]。一五四五—四六年、メッカ巡礼に行く途中小バスラで死去した。

〈第二世代〉

・Mawlanā 'Abd Allāh b. Mahmūd Shushari (表2—④)

シェーシタル出身^⑤。若い頃にシーラーズで理性による諸学 (ulum-i ma'qul) を学んだ後、アラブ地域へ行き、その地の学者たちと交流を持つ。中でもジャバル・アーミル出身の学者と交流し、法源論 (usūl) に通曉する。その後サファヴィー朝宮廷に行き、タフマースブのもとに伺候するが、ほどなくマッシュハドに移住する許可を得てイマーム・レザーの墓の側に住み、諸学の教導や信仰の普及に勤めた [TAA4, 154]。

彼は一六世紀末のマッシュハドを代表するウラマーである。そして、マッシュハドのウラマーの最高位に位置していたであろう彼は、一五八五年、Murshid Quli Khan がアッバース・ミールザーをマッシュハドに連れてきた時に、アッバースの腰帯を結びマッシュハドで即位の儀を執り行った [Khaqani, 126]。さらに、Murshid Quli Khan によりアッバースの教師に任じられ [Nugawati, 264]、良き相談相手としてアッバースに重用された [TAA4, 154]。このような信頼関係があったからこそ、'Abd al-Murmin Khan の侵攻時に、彼はアッバースに対してマッシュハドの荒廃を訴える書簡を送り、その書簡がアッバースをマッシュハド遠征に駆り立てるほどの効力を奏したと言える [Khaqani, 896]。反面、レザー廟のシーア派ウラマーの第一人者であったために、マッシュハド陥落時にウズベク軍によって捕虜として連行された。彼はマー・ワラー・アンナフルでタキーヤ(信仰の秘匿)を行い、シャーフイー派として振る舞うが、「ハナフイー派の狂信者たち」によって殺害され、遺体は焼かれた [Khaqani, 898-899, TAA4, 155]。

〈第三世代〉

・ Shaykh Lutf Allah b. 'Abd al-Karim Maysi (表 2-1-⑩)

シヤバル・アーミル地方のマイス出身。高名なシーア派法学者 Shaykh Ibrahim Maysi の孫。若い頃にレザール廟に参詣し、Mawlānā 'Abd Allāh Shushṭari を筆頭とするレザール廟のウラマーに師事。法学に通曉し、レザール廟の教師 (mudarris) の一員となる。ウズベク軍の侵攻時に救出されてからは宮廷に行き、しばらくカズウィーンで教授に従事する。後、アッバースの命によりイスファハーンに移る。アッバースは王のモスクの側に彼の名を冠したモスクを建設^⑪、彼はそのモスクで法学やハディース学の教授に勤しんだ [TAA4, 157]。一六二二年にイスファハーンで病死した [TAA4, 1008]。^⑫

・ Qādī Nūr Allāh b. Sharif al-Dīn Shushṭari Mar'ashi (表 2-1-⑪) *Qādir al-Nūrī* の持名を以て、*Qādir* シェーシエタルの Mar'ashi 家のサイイド。彼の父は al-Qāṭifi のもとでシャリーアの注釈を学び、

イジャーザを受けてゐる [Firdaws, 23, Rf, 1: 26-27]。一五七一年に「参詣と学問習得のために」故郷を出てマシエハドへ行き、マシエハドで Mawlānā 'Abd al-Wahid (表 2-1-⑤) に師事する。しかしキジルバシーの内訌により騒乱が絶えないため、一五八四年にインドへ移り、ムガル朝のアクバルに仕えた [Firdaws, 25]。彼は、シーア派信奉者であるにもかかわらず、アクバルのもとで厚遇され、ラホルの大カーディーを務め、スンナ派四法学派の見解に従ってファトワーを出した。一六一〇年に狂信的なスンナ派教徒によって殺害された。^⑬

以上、マシエハドで活動したウラマーの中から、主要な数人の経歴を詳しく見たが、ここでは触れられなかった他のウラマー^⑭も含めて彼らの経歴を世代ごとに検討すると、第一世代は、Iṣfahānī 及 Khaḥfa Asad Allāh (表 2-1-②) 以外には殆ど確認できないものの、シーア派諸学に通じた彼らのようなイラン出身の学識者たちが教授として活動していたことが指摘できよう。また、第二世代は、アラブ出身者で、シャイフル・イスラームやピーシユ・ナマーズとして任命された Shaykh Husayn (表 2-1-③) や Shaykh Faḍl Allāh (表 2-1-④) が教授を兼ねて活動するところを、Mawlānā 'Abd Allāh

や Mawānā 'Abd al-Wahid といつたイラン出身者たちが、アラブ地域やアラブのシーア派法学者から学んだ後に、マシユハドに移住し、教授として活動した。さらに、第三世代になると、はじめからレザイ廟で学問を習得することを目的にマシユハドを訪れ、第二世代の教授陣から学んでいたことが指摘される(表2—⑪⑫⑬)。このような世代ごとの推移は、徐々にマシユハドでの学問的活動が活発になっていたことを示唆しており、また、第一・第二世代の学者たちがアラブと関係の深いことから、マシユハドでは、アラブの伝統的なシーア派諸学が継承されたと見なし得る。

さらに、その学問的活動の内容について見ておくと、*Afṣal* には、九八〇年ラジャブ月(一五七二年一一二月)に、タフマースプが自分の教師 (*mu'allim*) であった Mawānā Aqā Janī Tabrizī (表2—⑭) に出したレザイ廟のイマドラサでの教授の許可証 (*parwanā*) が引用されている [*Afṣal*, II: 266 a-267 a]。この許可証から、主として神学 (*Kalām-i malik-i 'allam*)、法源論 (*uṣūl*)、法学 (*fiqh*)、ハディース学 (*hadīth*) などシーア派諸学全般が教授されていたことがわかる。加えて、Mawānā 'Abd Allāh Shūshṭarī がシャイブーン朝下でシャーフィイー派として振る舞ったり、Qādī Nur Allāh がインドで四法学派に依じてファトワーを出したりしていることから、彼らがシーア派法学とスンナ派法学の双方に通暁していたのは明らかである。後述する Mawānā Muhammad Mushakak Rūstandārī (表2—⑯) の書簡からも、彼のスンナ・ハディース等への造詣の深さが窺われ、マシユハドのウラマーは総じて、シーア派諸学を中心にイスラム学全般に秀でていたと考えられる。

以上見てきたように、一六世紀のマシユハドでは、アラブの伝統に基づいた正統なシーア派の教義や学問を学ぶことが可能であった。しかしながら、一六世紀のシーア派ウラマーの世界ではマシユハドは未だ二流の地であり、アラブ地域のシーア派諸学の中心地であるジャバル・アーミルやナジャフには到底及ばなかった。マシユハドでの学問に飽き足らず、ナジャフに勉学に赴く例もある。^⑰

しかし問題をイラン国内、すなわちサファヴィー朝領内に限ってみると、この時期マシユハドは第一級の一二イマーム

派シニア派諸学の中心地として発展しているのである。そのことはタフマースプ薨去時に活躍していたウラマーとして TAA4 に名前の挙がるウラマーの半数以上が、その時期にマシュハドで何らかの活動を行っていたことから明らかである。特に一六世紀後半にマシュハドに学問習得のために訪れた Shaykh Lutf Allah や Qadi Nur Allah たちが、その後一流の学者となっていることは、当時のサファヴィー朝領内でのマシュハドの学問的水準の高さを証明しているよう。一六世紀後半のマシュハドのウラマーは、当時のサファヴィー朝を代表するウラマーであると言っても過言ではない。¹⁴⁾

(2) 二イマーム派シニア派ウラマーの進出とその影響

では、一六世紀になって新たに続々と移住してきたシニア派ウラマーの存在は、マシュハドではどのように影響したのであろうか。

先に挙げた許可証では、Tabrizi の場合、年間総額三〇タブリーズイー・トゥマンの俸給がレザー廟のワクフ財から支払われることが明記されている [Aḥḥad, II: 267 a]。第一章で見たように、この俸給はタフマースプ自身のワクフ財によって賄われていたと考えることが可能である。このことから、Tabrizi がタフマースプの許可によって教授として赴任すると同時に、その際タフマースプが彼に経済的保障を確約していたことが明らかとなる。また、彼の他にも教授となったウラマーの中には、移住前に直接宮廷で王の許可を受けている者がいたことが確認される（表2—④⑤、また③⑨は任命）。彼らの場合にも、おそらく Tabrizi と同様の許可証が発行され、経済的な保障が約束されていたと判断してよいであろう。

○このようなシニア派ウラマーと世俗君主との関係は、サファヴィー朝創設時に al-Qāḍi が君主からの報奨を拒否した態度と大きく異なっている。¹⁵⁾ シニア派信仰を掲げたサファヴィー朝が、様々な問題を抱えながらも国家として確立された一六世紀中葉以降は、シニア派ウラマーの側も王朝の経済力を頼りに行動したと言えるのではなかろうか。というのも、彼らは「信仰と学問に従事する」という脱世俗的な目的を掲げてマシュハドに移住しているが、移住先がサファヴィー

朝領内のマシユハドの場合、彼らは世俗の王朝と無関係ではなく、むしろ逆に緊密であった場合が少なくないからである。アッバースと懇意であった Mawlānā 'Abd Allāh Shūstari などは、その典型であらう。もちろん、Mawlānā 'Abd al-Wahid のように、ウラマーの中には、宮廷での騒乱を嫌ってマシユハドに移住した者もいることから、おそらく宮廷のウラマーほど直接世俗事に巻き込まれることはなかったにせよ、マシユハドにいる限り、彼らはサファヴィー朝と密接な関係をもちつつ、その庇護下に暮らしたと考えられるのである。

さらに、シーア派ウラマーと王朝の相互依存という関係の密接さは、マシユハドの有力者層全体のサファヴィー朝に対する姿勢に変化を与えることになった。既に一六世紀中に、サイドはサファヴィー朝政権によって庇護される存在となっていた^⑩。本来の有力者層の中心を占めていたサイドに加えて、サイド以上に影響力のあった、新勢力のシーア派ウラマー層が同様に王朝によって優遇されたために、マシユハドではシーア派化が促進されると同時に、サファヴィー朝政権に対しての帰属意識が芽生えた。

マシユハドの有力者層の帰属意識は、彼らの一六世紀初頭と一六世紀末のウズベク軍に対する対応を比べてみると、より明確となろう。

一六世紀初頭には、サイドを中心としたマシユハドの有力者たちは、シャイバーン朝とサファヴィー朝の支配を交互に受ける激動期にあつて、どちらか一方の政権にのみ、帰順するのではなく、両政権の支配を抵抗することなく受け入れていた^⑪。そのため彼らの生命は保証され、彼らはどちらの政権からもサイドとして尊崇を享受し得た。しかし、新たに移住してきたウラマー層は、同じシーア派であること、さらに多大な庇護を受ける立場にあることによって、明らかにサファヴィー朝政権に加担した。一六世紀末、彼らは、直前のヘラート征服時に住民を虐殺したウズベク軍に対して恭順の姿勢をとっていない。先述のように、Mawlānā 'Abd Allāh Shūstari はアッバースに援軍を要請し、Rustandari は、ウズベク側のスナ派ウラマーに反駁の書簡を送った。このような彼らの行動から明らかなように、彼らはサファヴィー

朝を庇護者と見なし、シャイバーン朝に対しては敵対すると同時に、思想面での専門家として、サファヴィー朝のシーア派信仰を擁護したのである。

すなわち、一六世紀のマシュハドはシーア派政権庇護下の聖地であったため、ここではシーア派ウラマーとシーア派王朝は当然のように結びついた。その関係は、王朝からは経済面や軍事面での保護がウラマーに与えられ、ウラマーからは思想面での擁護が王朝に対して為されるといふものであった。これがこの時期にレザール廟を中心として都市全体で行われたという点に、聖地であるマシュハドの特異性があると言えよう。

以上見てきたように、シーア派聖地であるために他都市とは大きく異なり、都市の動向を決定する有力者層にシーア派ウラマーが進出したことで、マシュハドのシーア派化は決定的なものとなった。しかしウラマーが王朝側と結束し、その利害を共有するようになると、一面では危険も伴う。その危険が現実となったのが、以下に述べるように、一五八九年のウズベク軍の侵攻とマシュハドの陥落であった。

- ① 中でもイマーム・レザールとその父ムーサー（第七代イマーム）の子孫がマシュハドでは大きな影響力を持っていた [Mazharan, 1: 115]。Habib には、ティムール朝末期の有力者たちの略歴が紹介されているが、Sultan Husayn Mirza 時代（在位一四七〇—一五〇六）には、ムーサー家とレザール家のナキープたちを統括する三人のナキープの名が列伝の筆頭に挙げられている [Habib, 333]。

② 一ニイマーム派ウラマーの存在は、サファヴィー朝以前のマシュハドでは確認することはできない。スンナ派政権であったティムール朝期には、著名なウラマーは大半が首都ヘラートで活躍しており、一方マシュハドでは、ティムール朝末期からサファヴィー朝初期にかけては、マシュハド出身のサイイドが、既述のムタワツリーのみならず、

カーディーやシャイフル・イスラームといった専門的知識を要する宗教関係の職種をも担っていた [Habib, 334, 614]。

- ③ タフマースプ薨去時（一五七六年）に活躍していた主要なウラマーの列伝であり、一人のウラマーが載せられているが、その内の七人がマシュハドと関係する [Yafa, 154-158]。

④ これまでの研究では、サファヴィー朝初期の君主イスマーイールとタフマースプは一ニイマーム派の拠点であるバフラインやジャバル・アーミルから多数の学者をイランに招聘し、彼らがサファヴィー朝の正統なシーア派化に貢献したと言われてきたが、近年 Lewman はこの説を否定し、実際にはアラブの学者は、サファヴィー朝のシーア派信仰への嫌悪感と移住ウラマーの先駆者である al-Karak への反感

から、サニマウター朝を忌避し続けたら、その事を明らかびけた [A. J. Newman, "The Myth of the Clerical Migration to Safawid Iran: Arab Shiite Opposition to 'Ali al-Karaki and Safawid Shiism", *Die Welt des Islams* 33 (1993) [以下 Newman 1993 と略]]。

⑨ この頃の職に在る人々のシニア派ウミナーの増加については S. A. Arjomand, *The Shadow of God and the Hidden Imam: Religion, Political Order, and Societal Change in Shiite Iran from the Beginning to 1890*, Chicago and London, 1984, 129-132 を参照せよ。

⑩ 両者の論争については Newman 1993, 83-91 が詳し。

⑪ ニニヤーム派の法學書 *Risala al-Ja'fariya* 三人のカリンの呪詛を認めた *Nafihat al-Lahut fi Lar' al-Jibt wal-Taqiut* の二書による [M. T. Danishpazhuh, "Yek Parde az Zandagani-yi Shah Tahmasb Safawi", *Majala-yi Danishkada-yi Adabiyat wa 'Ulam-i Insani-yi Mashhad* 7-4 (1350) 967-968]。

⑫ 彼の一族については R. Quiring-Zoeche, *Isfahan im 15. und 16. Jahrhundert: Ein Beitrag zur persischen Stadtgeschichte*, Freiburg im Breisgau, 1980, 210-219 に各人物の略歴と系図が付わって、今日では不十分な点もあるが、参考になる。

⑬ 同じくシニョータル出身の Shaykh 'Abd Allah Shushartari と同名のウラマーが存在し、混同しやすい。彼の父親の名は Husayn。王の広場に隣接するモスク Masjid-i Shaykh Lutf Allah のこと。彼の兄弟の一人はシニョータルに留まり、ウスマン軍の侵攻の際にシニョータルで殉教した [Firdaws, 37]。因みに、Firdaws の著者 Mir 'Ali' al-Mulk は Qadi Nur Allah の息子である。

⑭ Shaykh Husayn 'Amili (表一⑨) については A. J. Newman, "Towards a Reconsideration of the 'Isfahan School of Philoso-

phy": Shaykh Bahari and the Role of the Safawid 'Ulama", *Studia Iranica* 15-2 (1986) 169-171 及び Mir Muhammad Baqir Damad (表一⑩) については S. H. Nasr, "Spiritual Movements, Philosophy and Theology in the Safawid Period", *The Cambridge History of Iran*, vol. 6, 1993, 669-675 をそれぞれ参照せよ。

⑮ Mawhana 'Abd Allah Yazdi (一五七四年頃没) は、フンタムル教師をよとめるが、ハディース学や法學などを学ばためにナジャンに行く。しかしナジャンでも満足できずにシヤムル・ブールルへ行き、ハディースの研究に従事したと云う [Khatirah, 587, 998]。これは同時のシニア派世界でのシニア派研究の伝統あるいは権威の差を示唆している。尚、シニア派諸学の中心地の時代的な推移については M. Momen, *An Introduction to Shi'i Islam*, New Haven and London, 1985, 61-145 に簡単に紹介されている。

⑯ 一五八九年にウスマン軍がレザイー廟に侵攻した際、廟内の図書館 (kitab-khana) には、イスラームの最も遠く諸都市から集められた様々な本が所蔵されていたと云う [TAA, 413]。また、フニョハムを奪回したアムナスは一六〇六年にレザイー廟とサフイー廟に書物のワタフを行い、レザイー廟には「法學、コーラン解釈学、ハディース学の書などアラビア語や学問の書」を、サフイー廟には「歴史書、詩集、アジャムの人の著作などムルシア語の書」を寄進した [TAA, 761]。この寄進内容からも、シニア派諸学に傑出していたフニョハムの学問の性格が読みとれよう。

⑰ al-Qatiri の場合、イマーム不在時の世俗君主は圧倒者であるこのシニア派法學の見解に従って行動し、君主からの報奨は [Makrath (置きしなくること)] と見なし享受しなかった [Tabib, 610, QV, 349-351]。al-Karaki は彼とは対照的にイヌトールからソムルガルをはじめ数々の報奨を受けた。一方で、タフマースは金曜日の夜と昼

にはシーア派のウラマーに金貨を下賜するなど、シーア派ウラマーを優遇する政策を行っていたという [Khutbat, 593]。このような政策が日常化する、al-Qa'ini のようなウラマーは少数派に属したと考えられる。

⑩ タフマースプは、毎年一四人のイマームたちの誕生日には、マシユ

ハドヤロムのサイイドに金貨を下賜して来た [Khutbat, 593]。
 ⑪ 例えば、一五二〇年のイスマーイール入城時 [Jafar, I: 180b]、一五一三年の Ubayd Allah Khan の征服時 [Habib, 533] など。本稿はじめに註⑩参照。

Ⅲ シャイバーン朝のマシュハド占領とサファヴィー朝のシーア派信仰

最後に、シャイバーン朝によるマシユハド侵攻の手がかりに、シーア派化の進んだマシユハドへのシャイバーン朝の対応を、当時のマシユハドを拠点としたサファヴィー朝のシーア派信仰の特徴と絡めて考察しよう。

(1) 侵攻の経緯

一五八八年三月、一年に互る包囲の後ヘラートを占領した^⑪ Abd Allah Khan は、マシユハド征服を目指して進軍した。ウズベク軍は、二カ月間マシユハドを包囲した後、一旦はバルフに帰還する [TAA, 389]。しかし、マシユハドまで進軍したアッバース Shah 'Abbas (在位一五八七—一六二九) が、西方領土にオスマン朝が侵攻したことや、ホラーサーンには食糧が不足していたことから撤退したために、Abd Allah Khan は翌一五八九年に、息子 Abd al-Mu'min Khan をマシユハド征服に向けて再度派遣した。

一度目の包囲時に、マシユハドの住民とマー・ワラー・アンナフルのシャイバーン朝下のウラマーとの間で、ウズベク軍のマシユハド攻撃を巡る興味深いやり取りが為されている。先にマシユハドの住民から出された、ウズベク軍の攻撃を非難する書簡^⑫に対し、シャイバーン朝下のウラマーは、ウズベク軍のマシユハド攻撃を合法 (halal) と見なす次のような返書を送りつけた。^⑬

スンナと共同体の民の宗派 (Madhab) とウラマーや敬虔なる者たちの神学 (Kalam) を完全に放棄し、信者たちを第一の信仰へと向かわせず、醜悪なるシーアの道を表明し、不信心 (Kufr) であるところの、二人のシャイフ様 (アブ・バクルとウマル) や二つの光の所有者様 (ウスマーン) や「ムハンマドの」清浄なる妻たちの幾人かを誹謗し呪詛すること (Sabb wa laim) を容認する者たちの場合においては、全知なる主の命令によると、イスラームの君主のみならず他の全人類にとり、彼らの殺害や弾圧は真の信仰の最も崇高なる行為として義務であり、必要なことである。また、彼らの家屋の破壊や財産の没収は認められる。[Abbas, I: 188]

ここでシャイバーン朝下のスンナ派ウラマーは、攻撃合法化の理由として「誹謗・呪詛」を挙げている。彼らによると、呪詛は「不信心」な行為であるために、呪詛を容認する者は不信心者 (Kafir) となり、その結果必然的に、不信心者の殺害として、マシユハド攻撃は承認されたのである。

このように、このファトワーでは「呪詛」がマシユハド住民を不信心者と見なす唯一の論拠となっているが、呪詛はサファヴィー朝のシーア派信仰と非常に密接に関わる重要な問題である。よって、シャイバーン朝下のスンナ派ウラマーが糾弾する「不信心な行為」であるところの「呪詛」について、サファヴィー朝内での経緯を簡単に見ておきたい。

(2) サファヴィー朝シーア派信仰における「呪詛」^④

一五〇一年にタブリーズで即位したイスマーイールは、一二イマーム派のフトバを詠み、シーア派を宣言すると同時に、カリフらへ呪詛を強制した。史料により多少の違いはあるものの、サファヴィー朝による呪詛の対象は、アリーの敵と見なされるアブ・バクル、ウマル、ウスマーンの三人のカリフ、ムハンマドの妻アーイシャなどであった。^⑤

イスマーイールが即位と同時に始めた呪詛行為の実態を具体的に示す例として、「Tabarrati」と呼ばれる一団の人々の存在が挙げられる。一五三九年から一五四〇年にかけてサファヴィー朝宮廷に滞在した *Membre* が宮廷内の興味深い光

景を述べているので引用しよう。

宮廷では王が座ると皆が座り、王が立ち上がると宮廷にいる皆が立ち上がる。朝、王が謁見の場へ行くために寝室を出る時、彼は二人の男を連れてくる。彼ら二人は各々金属製の太鼓を手に持ち、神を讃え、ウマルとウスマーンとアブー・バクルを呪いながら叫びだす。そして「ウマル、ウスマーン、アブー・バクルに無限の呪いあれ (šad hazār lanat bar 'umar, 'uḥmān, Abū Bakr)！」と言い、王が席に着くまで叫びながらついていく。それから彼らは静かになる。また、王が部屋に戻ろうとした時も、彼らは王が部屋に入るまで同様に叫び続ける。王の兄弟も同様に、宮廷に行こうとする時には、これらの「*tabarrā'i*」と呼ばれる人々の一人を連れて行く。彼は王の兄弟が席に着くまで同じことを叫ぶ。[Membre, 201]

Membre が記すように、彼ら「*tabarrā'i*」は、呪詛を生業とする職業集団であり、王の傍らにつき従って三人のカリフやオスマン朝に対する呪詛を日常的に行っていた。^⑥

「*tabarrā'i*」に象徴されるこのようなサファヴィー朝の呪詛行為は、当初から過激で逸脱した行為として認識され、イラン国内の各地で動揺を引き起こした。^⑦さらに、一五二二年に即位したオスマン朝のスルタン・セリムによって、本格的に非難を受けた。^⑧セリムは呪詛に限らずサファヴィー朝のシーア派信仰全般を激しく非難したために、そのような非難に答えるべく、イスマールはアラブの二イマーム派シーア派法学者をイランに招聘した。これらのシーア派法学者の中で最初に呪詛を公認したのが al-Karaki であり、彼が呪詛を擁護する書をも執筆したことは既に触れた。^⑨

しかしながら、実際はサファヴィー朝に迎合した al-Karaki の態度はアラブの二イマーム派のウラマーからも非難されたのである。QUT には以下のように記されている。

シャイフ (al-Karaki) はイスファハーンに到着した日、その日の朝モスクへ行き、集団礼拝を行った。礼拝の後、シャイフの弟子の一人がミンバルに登り、敵対者たち (mutakallifān) への誹謗 (sabb) を公言した。この時までその町では誹謗が公言されたことはなかった。

メッカにいたシーア派のウラマーはイスファハーンのウラマー、すなわちミフラーブやミンバルを所有する者たちに書簡を送った。「あなた方はイスファハーンで敵対者たちを誹謗した。我々は両聖地 (Qadisiyah) にいるが、民衆はそのような誹謗ゆえに我々を苦しめ懲らしめている。」 [Qu. 348]

この記事に見られる如く、呪詛は、正統な一二イマーム派ウラマーからも非難されるほど異端的な行為であったが故に、隣国のスンナ派国家には、格好の対立・攻撃の根拠を与えた。セリム以後、オスマン朝もシャイバーン朝も、サファヴィー朝のシーア派信仰を非難する際、常にこの呪詛行為を中心に据えて糾弾したのである。^⑩

さらに、ウラマーからの法的な糾弾だけでなく、当時の一般認識もまた、呪詛を特別な行為と見なし、それによってスンナ派とサファヴィー朝のシーア派を区別していたことが諸史料より明らかとなる。例えば、オスマン朝の 'Ali Rais はカズヴィーンのタフマースブの宮廷で宗教論争を行った時に、「ルーム(オスマン朝)のウラマーは我々を不信心者と見なしているが、理由は何か?」という質問に対し、

「教友たちを誹謗 (Sabb) するからである、と聞いています。法学書には『二人のシャイフの誹謗は不信心である』と書かれています。」 [Ali Rais, 89]

と端的に答えている。また、一六世紀中葉にマシヌハドで五年間ハナフィー派法学とシーア派法学を学んだというスイースターンのハーキムの弟は、両宗派の特徴をいみじくも次のように述べている。^⑪

「シーアの教義 (madhab-i shi'a) では、誰かが教友たちを呪詛 (lan) すると適切 (sawab) と見なします。ハナフィー派は、呪詛を行うと不信心者 (kafir) になると主張します。」

これらの事実から、サファヴィー朝シーア派信仰とは、外部の者から見た場合でも、主に呪詛行為がその特徴として焦点となっていることが明らかとなろう。つまり、サファヴィー朝のシーア派教徒、すなわち呪詛を行う人々という認識が、オスマン朝やシャイバーン朝のスンナ派教徒の間にも出来上っていたのである。そしてこのような呪詛を行うシーア派教

徒は、*‘Ali Rā’is* たちが言うように、スンナ派からは不信心者 (*kafr*) と見なされていたのである。

再びサファヴィー朝内の状況に目を転じると、不信心者とまで認識され、スンナ派・シーア派を問わず糾弾されたにもかかわらず、*al-Karakī* の容認を背景に、タフマースプもまた呪詛への固執を示した^⑩。その結果、イスマーイール二世が即位するまでこの行為はイラン国内で連綿と続けられたようである。

一五七六年、タフマースプの死後即位したイスマーイール二世は、スンナ派で名高い *Mirzā Maḥdūm Sharīfī* を登用し、呪詛を中止しようとする^⑪。しかしイスマーイールのこの方針に対して激しい反発が内部から生じるのである。

〔呪詛を中止せよとの命令に対し〕勇敢なるハイダル(アリー)に忠実なシーア派教徒たちは、この知らせを *Mir Sayyid Husayn* と *Mir Sayyid ‘Ali* に伝えた。激情の炎が輝く彼らの心に燃え上がり、彼らはモスクに駆けつけた。説教師 (*khātib*) をミンバルから降ろし殴り蹴った。そして故 *Mir Sayyid ‘Ali* はミンバルに登り、二人のイマームたちのフトバを詠み、呪われし者たち (*malā’in*) を呪詛し、中傷した。^⑫ [*Sulṭanī*, 99]

一六世紀後半、イランのウラマーの中には、*Sharīfī* のように呪詛を批判する者がいた。一方ここに見られるように、過剰なまでに呪詛に執着するウラマーもまた、この当時存在したのである。サファヴィー朝下のウラマーの間でさえも変動の見られた呪詛であるが、イスマーイール二世が在位わずか一年半で亡くなると、復活したことは想像に難くない^⑬。

以上の呪詛を巡る経緯をまとめると、サファヴィー朝の成立と同時に始まった三人のカリフやアーイシャなどに対する呪詛は、スンナ派のみならず、アラブの「正統な」シーア派ウラマーからも非難された逸脱した行為であったにもかかわらず、一部のウラマーによる承認や「*tabarrūtī*」と呼ばれる人々の日常的な活動に支えられながら、必要不可欠なものとして、サファヴィー朝のシーア派信仰の基調を成すに至る。従って、当時スンナ派とサファヴィー朝のシーア派を隔てる境界は、偏にこの「呪詛」を行うかどうかにあったと言えよう。

シャイバーン朝のウラマーがサファヴィー朝の呪詛行為を攻撃合法化のための論拠と為した背景には、このような呪詛

を巡る歴史があり、スンナ派にとっては容認しがたい状況が一六世紀の末まで存続していたのである。^⑧

(3) ウラマーの往復書簡に見るマシュハドのシーア派信仰

それでは、本章のはじめに挙げたシャイバーン朝下のウラマーによるサファヴィー朝シーア派信仰への批判に対し、当時のサファヴィー朝を代表するマシュハドのウラマーは、どのように応えたのであろうか。

レザー廟で二〇年間教鞭をとっていた Rustandari (表 2-1⑥) がこの批判に対して反駁を試みた。彼はコーランやハディースを用いて様々なシーア派の論拠を提示し、「シーア派」が不信心者であると主張するスンナ派ウラマーの攻撃に伝えていく。そして最終的に彼は、シーア派が不信心であることは証明されない、と断言する [Abbas, I: 196-207]。

しかしシャイバーン朝下のウラマーは、「行を放棄し、偉大なる教友たちを誹謗し呪い、さらにはそのような不信心や罪を報酬 (thawab) の誘因と見なしている者たち」 [Abbas, I: 192] と、サファヴィー朝のシーア派教徒のことを規定したように、実際には、シーア派信仰そのものを批判するのではなく、呪詛を行うシーア派教徒を非難したのであった。前節で見たように、呪詛がサファヴィー朝の始めた過激な行為であり、本来の正統なシーア派教義から逸脱する行為であったからであろう。それに対して、正統なアラブのシーア派諸学の伝統の中で学んだと思われる Rustandari は、この呪詛への非難には次のように応えている。

シーア派であることの理解は、……誹謗 (sabb) や呪詛 (la'n) が賞賛されているのではなく、三人のカリフの名は絶対にシーアの民の口にはのぼらないと言えよう。彼らの呪詛は義務ではないのである (waajib hiwā)。もし、シーアの無知な者たちが呪詛の必要性を命じたとしても、彼らの言葉は賞賛されるものではない。それは、スンナの民の無知な者がシーアの殺害の必要性を命じたとしても、その命令が祖先の思想と子孫の見識に相応しくないので同様である。 [Abbas, I: 203]

この発言からは、彼自身は呪詛行為を決して奨励していたのではないことが明らかであろう。換言すると、Rustandari

のようなマシュハドの一二イマーム派ウラマーの認識としても、「シーア派である」ということと「呪詛を行う」ということとの間には、実は大きな隔たりがあったのである。そして彼にとって、自己の信仰の正当性を主張するための「シーア派」の論拠を詳細に提示することはできようとも、呪詛行為そのものを正当化することは不可能であった。正当化できなかったがために、Rustandariは「呪詛は義務ではない (wajib nist)」という表現を使ったのであろうと思われる。逆に、おそらく自分ではたとえそれが異端行為であり、奨励できないものであると認識していても、サファヴィー朝に庇護される立場にある彼は、国内ではそれを黙認し、他方、シャイバーン朝下のスンナ派ウラマーに対しては「義務ではない」という至って消極的な意見を述べなければならなかったのである。^⑩

このように、呪詛に関しては不十分な返答しかできなかった Rustandari であるが、彼はスンナ派ウラマーに敢えて反駁することによって、ウズベク軍のマシュハド侵入を防ぎ、聖地を守ろうとした。^⑪ 但し、その時彼が守ろうとしたのは、軍人階級であるキジルバール・シュとは無関係な「住民」であった。書簡の冒頭で、彼は「キジルバール・シュに対して親しみを抱いているわけでもなく、ウズベク族に対して不快感を抱いているわけでもない」[Abbas, I: 195]と、殊更にキジルバール・シュ軍との無関係さを強調し、中立を装っているのである。

彼のこのような行動の背景には、それまでのシャイバーン朝の侵攻時の対応が影響していると考えられる。というのも、一六世紀のマシュハドへのウズベク軍による幾度かの侵入を見ると、一六世紀初頭の 'Udayd Allah Khan は「マシュハド攻撃の際にキジルバール・シュを殺害することはあっても、聖地の住民に危害を加えることは一度としてなかった。同時に彼は占領後、レザール廟に参詣し、有力者たちを慰撫していた。また、一五六四年に侵入した Pir Muhammad Khan は、マシュハドの住民の要請に応じて途中で侵攻を後悔し、レザール廟に奉納を送って帰還している [Khuṭbat, 442]。このように、それまでのウズベク軍は総じてマシュハドという聖地とキジルバール・シュではない住民に対して好意的な場合が多かったのである。

さらに、一五八八年のマシユハド侵攻の直前に行われたヘラート侵攻時には、'Abd Allah Khan はヘラートのハーキム、'Ali Quli Khan と一旦は和議を締結しようとするが、その意志を変更したという。その理由は、「シーア派の残忍な道を選んだキジルバーシユとして知られる不信心者の集団からのホラーサン解放の必要性」と「トルコマンによって虐げられた民衆の悲惨な状態の緩和の必要性」であった。^④すなわちヘラート侵攻の場合、根拠となったのは「キジルバーシユによる圧制」であり、表向きの攻撃対象はキジルバーシユであった。^⑤この時点まで、ウズベク軍にとって、不信心者であるが故の攻撃対象とは、サファヴィー朝の土台を支えるキジルバーシユ集団であり、住民は攻撃の対象から外れていたのである。

しかし今回の 'Abd Allah Khan 父子のマシユハド攻撃の場合には、ウズベク側のウラマーの書簡からも明らかのように、マシユハドのキジルバーシユと住民の区別は最初から為されていない。その上、書簡によると、彼らはマシユハドを「戦争の家 (dar al-harb)」に属すと断言し ['Abbas, I: 192]、彼らにとってイマームの墓廟が、もはや聖地として見なされてはいることを明確にしている。また、彼らはマシユハドのサイドをサイドとは見なしていない。それは以下の言葉から理解されよう。

書き送ってきたところによると、この地の住民は大半が預言者の子孫である、とのことである。思うに、「彼はおまえの家族ではない。彼の所業はよろしくない」(コーラン一章四六節)という御言葉を彼らは聞いたことがないようである。 ['Abbas, I: 192]

当時マシユハドのモスクでは、アラブ出身のピーシユ・ナマーズによって呪詛が公言されていたであろう。第二章で見たとように、サファヴィー朝と結託するシーア派ウラマーの存在は、マシユハドで呪詛が活発化したことを示すにあまりある。「所業がよろしくない」と述べられているのも、呪詛行為を指すと考えられよう。一方で Rustandari のように、呪詛が賞賛されるものではないと思っても、現実の前でそれを黙認した者たちがいたことも事実であるが、しかし、町中での呪詛が黙認されているという事態そのものが、シャイバーン朝にとっては容認されざることであった。彼らは言う。

たとえ一部の者が、「我々はこのような話をしたことがなく、また今後ともしないであろう」と言ったところで、このような戯言を耳にしたにもかかわらず止めなかったことは疑い得ない。それ故、この者たちもまた、彼らと同様となるのである。[Abbas, I: 190-191]

すなわち、率先して行う者だけでなく、それを傍観している者たちも同様に、サファヴィー朝を支持するシーア派教徒であると彼らは見なした。「〜に呪いあれ (Tanat bar.）」という一言により、キシルバーシユのみならず、住民もまた、呪詛を行う不信心者として一括され、そして不信心者であるが故に、殺害・略奪の対象として合法と判断されたのである。^② その結果、四カ月に及ぶ包囲の後、Abd al-Mur'in Khan 率いるウズベク軍は城壁内に突入し、キシルバーシユ軍をレザール廟に追いつめた後、レザール廟内で容赦なく戦闘を繰り広げた。ウズベク軍襲撃の様子を TAAH は生々しく伝えて

兵士たちの奮闘も抑圧された者たちの祈りも運命には抗しきれず、ウズベク軍は中庭 (salin) の周囲を包囲し、双方から矢や銃弾が飛び交った。Abd al-Mur'in Khan と Dīn Muhammad Sultan は……敷居 (レザール廟) の中庭に入った。キシルバーシユのガージーたちは……奮戦したが、一人一人苦難の杯から殉教の酒を味わい、敵の流血の剣により聖なる敷居の中庭には死者が積み上げられた。「ハーキム」Ummat Khan は武器を身につけた兵士や住民と共に戦ったが、殺害された。ウズベク軍は勇者たちを片づけると、敬虔な者やウラマーやサイイドたちの殺害に取りかかった。[TAAH, 412-413]

最終的に、レザール廟やその付近での死者の数はおよそ五七〇〇人にのぼり [Khatūsat, 88]、捕虜となった者の中では、二〇〇〇人から三〇〇〇人が殺害された [Nūqtat, 373]。さらにウズベク軍はレザール廟の金銀の燭台や宝石や書物をも略奪した。このような虐殺や略奪は三日間続き、三日後、大勢の婦女子が捕虜となって連行された [TAAH, 43-44]。特に、レザール廟に避難していた有力者たち、中でもウラマー層は壊滅的な打撃を受け、最高位にあったウラマーが捕虜となって連行され、長年レザール廟で教鞭をとっていた他のウラマーやムタワッリーやピーシユ・ナマーズが殉教した。殉教を免れ

た者たちもイシキェハドを後にしなければならなかった。

こうして一五八九年一〇月、'Abd al-Mu'min Khan はイシキェハドを占領した。以後、一五九八年に 'Abd Allāh Khan と 'Abd al-Mu'min Khan が相次いで亡くなるまで、十年間に互りイシキェハドはシャイバーン朝の支配下に入る。

① 'Abd Allāh Khan のイラート包囲を論じたものとして、A. Burton, "The Fall of Herat to the Uzbeks in 1588", *Iran* 26 (1988): R. D. McChesney, "The Conquest of Herat 995-6/1587-8: Sources for the Study of Safavid/Qizilbāsh-Shibānī/Uzbek Relations", *Etudes Safavides*, ed. J. Calmard, Paris-Téhéran, 1993 [以下 McChesney 1993 と略記] がある。

② 書簡の内容は、'トーン殿下 ('Abd Allāh Khān) と殿下の兵士たちは、どのような論拠と証拠 (dālil wa burhān) をもって、神聖なイシキェハドの包囲とこの地の住民——大半が預言者様の子孫である——の根絶を自らの合法 (halāl) とおかれているのか。人々の生命や財産や耕作地に対して、またイザール廟 (sarkār-i fayḍ-āthār) のワタシ物件に対して略奪や強奪や殺害の手を広げるのか」とどうおぼえられた [McChesney, I: 101]。

③ シャイバーン朝のワシヤーからの書簡と Rustandārī の書簡は、幾つかの史料に載せられてはいるが、ここでは 'Abbas, 188-208 を参照した。これらの書簡のより詳細な検討は、他日に期したい。

④ 呪詛を表す語として ['ān, la'na'] 以外に ['sabb'] ['ān'] ['dash-nām'] などが用いられる場合もある。サフアワー朝の呪詛については J. Calmard, "Les Rituels et le Pouvoir—l'imposition du shiisme safavide: eulogies et malédictions canoniques", *Etudes Safavides*, ed. J. Calmard, Paris-Téhéran, 1993 が詳しく考察を行っている。

⑤ 天国を約束された十人の教友たちやウマイヤ家・アッバース家 [Khulafat, 73]、サフアワー朝の敵であるオスマン朝もまた、呪詛の対象とされた [Membre, 24, 52]。

⑥ 一五三〇年のシャームの閱兵式では、キシルバーシユ諸部族などに続いて四〇〇人の *tabarrā'i* が行進している [Khulafat, 203]。また、*tabarrā'i* が軍營 (urdū) の移動時にオスマン朝への呪いを代わる代わる叫びながら徒歩で先頭を行くこと、シャームを賞賛すること、町の広場でシャームの武勇伝を歌にして人々から金をもらっていることなども Membre は伝えている [Membre, 24, 41, 52]。

イスマーイール二世時代の *tabarrā'i* については、R. Stanfield, *Mirza Mahdum Sharif: A 16th Century Sunni Sadr at the Safavid Court*, Princeton University Ph. D. Dissertation, 1992 [以下 Stanfield 1992 と略記] 81-85, 112-118 が詳しい。

これまでのところ、彼らの姿が確認されるのは、ヘラート、タンブリーズ、カズヴァーンである。他の大都市で彼らが職業集団として存在したかどうかは不明であるが、彼らによって日々カリフたちの呪詛が町中で叫ばれていたのであれば、彼らの存在は呪詛の浸透を進める上で非常に重要であったと言えるであろう。正統なウラマーの権威のみならず、*tabarrā'i* のような人々の存在の上にサフアワー朝シーム派信仰は地盤を築いていっているのではなかろうか。

⑦ 即位後、イスマーイールはすべての都市でシャイフたちに一二イーム派の教育を行わせる一方、カリフの呪詛を強制した [McChesney,

II: 234]。このカリフや教友たちを呪詛する政策に対して、特に、ラートにおいては、有力者や住民の間で激しい動揺があったことが明らかになっている〔久保一九八八、一三七一—一四四〕。

⑧ Eberhard はオスマン朝下のウラマーによるサファヴィー朝に対する非難として、(1)姦通、(2)飲酒、(3)礼拝の不履行、(4)コーランの軽視、(5)キブラの変更、(6)スンナ派の呪詛、(7)墓の冒瀆、(8)メッカ破壊計画、(9)圧制、(10)信仰の破壊、(11)神性の主張、などを挙げている〔Eberhard, *Osmantische Polemik gegen die Safawiden im 16. Jahrhundert nach arabischen Handschriften*, Freiburg im Breisgau, 1970, 84-128〕。これらすべて、遊牧部族であるキシルバシーの思想傾向を反映した「過激シーア派信仰」あるいは「キシルバシー的シーア派信仰」として特徴づけられているものである。

⑨ 本稿第二章註⑤参照。

⑩ 例えば、シャイバーン朝の 'Ubayd Allah Khan のからの書簡(一五二九—一三〇年)では、サファヴィー朝のシーア派信仰の中でも呪詛行為のみが批判されている〔Tahmāsb, 32〕。Dickson によるこの書簡の考察も合わせて参照された。〔Dickson 1958, 180-187〕。また、オスマン朝のスレイマンからの書簡(一五五四年頃)では、「特に『Kahshān』と称して二人のシャイバンの呪詛を非難している。〔Tahmāsb, 201-202〕。

⑪ ムガル朝の Humāyūn が一五四四年にサファヴィー朝に亡命した時の話である〔Bāyazīd Bayāt, *Tadhkirat-yi Humāyūn wa Akbar*, ed. M. H. Husayn, Calcutta, 1941, 9-10〕。ノーキムの弟がトマシハドで学んで来た時期は、Isfahāni (表二—①) が隠棲し、教導に勤しんでいた時に相当する。

⑫ タフマースプの呪詛への固執は、Isfahāni のサドル職罷免にも現れた。彼が罷免された直接の理由は宮廷医師による讒言であったが、

〔サドルが罷免された〕別の要因は次のようなものである。ミーラ(Isfahāni)はシャーに「オスマン朝(rūmīya)のために得策として幾日か呪詛(tar)を中止いたしませよ」と上奏した。シャーはこの言葉に立腹し、その席(majlis)で彼を殺さうとした。〔シャーは〕サイイドたちの取りなしにより思い止まったが、二度と彼と関わらなかつた〔Khatibāt, 283〕。

とあるように、オスマン朝との関係が悪化していた当時に、サドルが呪詛の中止を申し出たことがタフマースプ立腹の原因となったのである。Beeson は Isfahāni 罷免の一因と見做す。たこの点については全く触れていない。〔Beeson 1982, 97〕。

⑬ イスマーイール二世の信仰及び彼の政策によるカズヴィーンを宮廷への混乱等に関つては、W. Hinz, "Schah Esma'il II: Ein Beitrag zur Geschichte der Safawiden", *Mitteilung des Seminars für Orientalische Sprachen* 36 (1933) 76-85; Stanfield 1992, 95-118 を参照された。

⑭ ここて名前の挙がる Mir Sayyid Husayn は、al-Karakī の娘の子であり、アルダビールのシャイバーン・イスマーイールを務めムシタマの地位にあった〔TAMM, 145, 458〕。また Mir Sayyid 'Alī Astārābādī 著 *Sulṭān* の著者の祖先である。この事件は、Mir Sayyid 'Alī Muṭṭibī とつて有名になった。〔TAMM, 150〕。

⑮ イスマーイール二世の死後、カズヴィーンでは呪詛中止政策の煽りを受けた *tabarrūt* たちが、呪詛中止の張本人である Sharīf に対つて暴動を起つていす〔Stanfield 1992, 116-117〕。

⑯ 今後さらなる検討を要すが、後世の呪詛について付言すると、呪詛はサファヴィー朝下で存続し、十七世紀末のイランではあらゆる機会や礼拝時に呪詛が叫ばれ、人口に膾炙していたと見られる。但し、ここでの呪詛の対象はウイールに限定されている。〔Kaempfer, 35, 36, 177〕。

①7 Rustandari は、別の箇所です。「二人のシャイフの誹謗は不信心である」というハディースを捏造されたものと見なし、深く論ずることなく切り捨てている [Abbas, I: 205]。

①8 彼は、ウラマーの役割は君主の怒りを鎮めることであり、それを煽ることはない、と述べ、ウズベク側のウラマーの態度を非難している [Abbas, I: 206-207]。

①9 McChesney 1993, 84. さらに、ホラーサーン遠征は「シャリーアを放棄したキジルバシーンに対する個々人の絶対的義務 (Farḍ ‘ayn)」と位置づけられており [McChesney 1993, 82]、ウズベク側の法学者たちはキジルバシーンを不信心者と見なすファトワーを発行したという [McChesney 1993, 92]。

②0 実際には征服後、キジルバシーンのみならず、大勢の「タージーク (Tajik)」もキジルバシーンと信仰を同じくしていたことを理由に殺害され、「シーア派狩り (faḥḥi kushṭan)」が横行した [Taha, 388-389]。

おわりに

一六世紀のマッシュハドのシーア派化は、第一に、サファヴィー朝という新たなシーア派政権による他都市には類例を見ない程の軍事的・経済的庇護政策、第二に、この政権の庇護下に国内外から移住し、有力者の一翼を担った一二イマーム派シーア派ウラマーの存在に拠るものであった。しかしながら、王朝とウラマーの双方によってシーア派信仰が強化されたマッシュハドでは、一六世紀末に、サファヴィー朝シーア派信仰の基調を為す呪詛を攻撃合法化の論拠としたウズベク軍により、躊躇いもなく住民が虐殺され、レザール廟も略奪されるというマッシュハド史上未曾有の大惨事を招いたのであった。本稿で扱ったマッシュハドは、イランにおけるシーア派化を論ずるための事例としては特異にすぎないかもしれない。しか

②1 かつて Ibn Rūshān は、キジルバシーンを非難する際に、呪詛を論拠とした (久保一九八八、一四三)。半世紀を経てもシャイバーン朝下のウラマーの主張に変化は見られず、非難の対象がキジルバシーンから住民へと拡大されたのみである。このようなウズベク側の認識は、逆に、当時のマッシュハドにおいて呪詛がキジルバシーンから住民へと広まっていた証左となる。

②2 ウズベク軍突入のきっかけはマッシュハドの民衆であった。一部の民衆は食糧難の事態に耐えきれず、またレザール廟の財産を横領する当時のハーキムに対する嫌悪感から塔の下に穴を開けた [Khalafat, 897]。この事実から、民衆レヴェルではサファヴィー朝の支配が根付いていなかった可能性を指摘し得る。これは民衆と有力者層の政権との距離の違いではなからうか。

②3 このウズベク軍の虐殺行為は後世語り継がれていく中で、住民の三分の二が殺害されたと言われるほどになる [Matala, 4]。これは明らかに誇張であろうが、当時の侵攻の激しさをも伝えている。

し、マシユハドの事例から明らかになったように、広くサファヴィー朝下のイランでは、王朝側から優遇されたサイイドやシーア派ウラマーによってシーア派化が促進されたと考えられる。特に、シーア派ウラマーは王朝の庇護と引き替えに、王朝の思想を普及し、教化し、擁護するという役目を担っており、一七世紀半ばのシャー・サフイー（在位一六二九—一六四二）以降、宮廷に集まる彼らによって政治が動かされる程、その影響力は強くなる。

一方で、成立当初は数々の点で非難され、その信奉者が支配階級のキジルバシユに限定されていたサファヴィー朝シーア派信仰は、一六世紀の間に、呪詛行為に収斂されるようになった。そして、「くに呪いあれ」という単純な行為であるこの呪詛行為が、マシユハドの場合で明らかになったように、スンナ派からの激しい攻撃対象となる危険性をはらんでいた。しかしながら、見方を変えると、呪詛は、その単純さの故にサファヴィー朝下の住民のシーア派化に寄与したと言えるのではなからうか。

今後、他都市のシーア派化とその状況、及びシーア派化に際してシーア派ウラマーの果たした役割をより広範に検討しなければなるまい。それによって初めて、イランのシーア派化と現代見られるウラマー政治の基礎を作り上げた一六世紀のサファヴィー朝下のイラン内部の状況が明らかになることであろう。

（京都大学大学院生 京都市左京区高野東町一—二三高野第三住宅三—一〇〇）